(七) 時ノ助動詞
(八) 敬語ノ助動詞
(九) 否定ノ助動詞

第一節　受身の助動詞

『鼠ガ猫ニ取ラレル』『盗賊ニ盗マレル』『僕ヲ何時モ友人ニ慰メラレル』『汽船ニ助ケラレル』のごとく、或る物に動作を受ける意味を表彰する爲めに、動詞に結び付けられるレル、ラレルを**受身の助動詞**という。

レルわつねに五段活用の動詞の否定形に接續し、ラレルわ上一段活用、下一段活用、カ行變格活用及びサ行變格活用の動詞の否定形に接續する。其活用の形式わ下一段活用と同樣であるが、然し乍ら、活用形の用法にわ多少の相違がある。

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	未來形
押サレ(ナイ)(ン)	＝レ(テ)	＝レル	＝レル	＝レレ(バ)	＝レ(ヨウ)	＝レ(ヨウ)
助ケラレ(ナイ)(ン)	＝ラレ(テ)	＝ラレル	＝ラレル	＝ラレレ(バ)	＝ラレ(ヨウ)	＝ラレ(ヨウ)
來ラレ(ナイ)(ン)	＝ラレ(テ)	＝ラレル	＝ラレル	＝ラレレ(バ)	＝ラレ(ヨウ)	＝ラレ(ヨウ)

但し、サ行變格でわ、シラレルと、セラレルの二種の形式が、成立つわけであるが、然し、この形式わどちらも單獨にわ用いられることが尠ないので、普通之を約めたサレルを用いるのである。其活用を示すと、

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	未來形
サレ(ナイ)(ン)	＝レ(テ)	＝レル	＝レル	＝レレ(バ)	＝レ(ヨウ)	＝レ(ヨウ)

然し、漢語或わ國語の名詞に連續する場合にわ、シラレル、ジラレル、セラレル、ゼラレル、サレルの五種の形式が幷び行われる。

何ウシテモウマク目的ヲ達シ、シラレナイ。

君ノ心配ワホントニ察セラレル。

昨日ヤカマシク談ジラレタ。

ウマク乘ゼラレタモノダナ。

乘リ逃ゲサレテ馬鹿ヲ見タ。

第二節　可能の助動詞

能力を表彰するために動詞に結び付けられたレル、ラレルを可能の助動詞という。或る學者わこれに勢相又わ能動という名稱を與えて居る。

レルわ五段活用の動詞の否定形、ラレルわ上一段活用、下一段活用、カ行變格活用、サ行變格活用の動詞の否定形に附屬する。

御酒ヲ少シモ頂カレマセン。

ソノ見事ナコトワ言ウニ言ワレマセンデシタ。

芝居ナドワ何時デモ見ラレマス。

二時間アレバ樂ニ行カレル。

來年ニナルト、海軍兵學校ノ試驗ガ受ケラレル。

可能の助動詞が五段活用の動詞に附屬する場合に、その形式を約めることがある。例えば、書カレル、押サレル、打タレル、死ナレル、言ワレル、飲マレル、取ラレル等を書ケル、押セル、打テル、死ネル、言エル、飲メル、取レルという。

その活用の形式わ下一段活用と粗ぼ同樣であるが、但し命令形がない。又活用形の用法も多少相違する。

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	未來形
書ケ（ナイ）（ン）	＝ケ（テ）	＝ケル	＝ケル	＝ケレ（バ）	＝ケ（ヨウ）
打テ（ナイ）（ン）	＝テ（テ）	＝テル	＝テル	＝テレ（バ）	＝テ（ヨウ）
飲メ（ナイ）（ン）	＝メ（テ）	＝メル	＝メル	＝メレ（バ）	＝メ（ヨウ）

又佐行變格の動詞に附屬する場合にわ、受身の場合と同じく、シ

ラレルとセラレルと二種の形式が成立ち、それが更に約められてサレルとなることがある。それから、漢語や國語の名詞をサ行變格に活用する時にわ、シラレル、ジラレル、セラレル、ゼラレル、サレルの五種の形式が并び行われる

コノ位勉強スレバキット目的ガ達シラレル。

僕デモコノ位ナコトワ判ジラレル。

コノ節ワ暑クテ勉強セラレナイ。

仇ヲ報ゼラレタ。

コノ學説ワ六カシクテ容易ニ理解サレナイ。

可能の助動詞わ能力を表示するのであるが、然し其能力も一定の意識なくして、自然に起る場合がある。例えば、

今日ワ大層御飯ガ食ベラレル。

子供ノ行末ガ案ジラレル。

何ダカドウモ不安心ニ思ワレル。

第三節　使役の助動詞

或るものが或るものに動作を行わせる意味をあらわすために、動詞に結び付られるセル、サセルを**使役の助動詞**という。

セルわ五段活用の動詞の否定形に、サセルわ上一段活用、下一段活用、カ行變格活用、サ行變格活用の動詞の否定形に附屬する。

文語においてわ、使役の助動詞に馬ヲ走ラス、試驗ヲ受ケサス、學校ニ入ラシムの如く、ス、サス、シムの三種あつたのであるが、現代の口語にわ、その中のシムが滅びてしまつた。尤も狂言記にわ殺サシメ、行カシメの如く、敬語の場合に其面影を殘して居る。

使役の助動詞の用例を擧げて見ると、

自轉車ヲ非常ニ早ク走ラセル。

船ヲ池ニ浮カセル。

子供ニ試驗ヲ受ケサセル。

相撲ヲ見セテアゲマショウ。

心配デスカラ今日ワ止メザセマス。

セル、サセルは下一段に活用するので、その活用の形式を示すと、

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	未來形
取ラセ(ナイ)(ン)	＝セ(テ)	＝セル	＝セル	＝セレ(バ)	＝セ(ロ)(ヨ)	＝セ(ヨウ)
捨テサセ(ナイ)(ン)	＝セサ(テ)	＝サセル	＝サセル	＝サセレ(バ)	＝サセ(ロ)(ヨ)	＝サセ(ヨウ)
來サセ(ナイ)(ン)	＝サセ(デ)	＝サセル	＝サセル	＝サセレ(バ)	＝サセ(ロ)(ヨ)	＝サセ(ヨウ)

但し、サ行變格の動詞わシサセルとなるべき譯であるが、然しながら、此形式わ全く用いられないで、普通にわその約められた形式のサセルを用いる。卽ち、

若イモノニワ少シ難儀ヲサセル方ガヨロシイ。

アレニ案内ヲサセマショウ。

モウ少シ辛棒サセテ見ヨウ。

という。但し、漢語の動詞の二音のもの、たとえば、周旋、勉强、我慢、奔走等にわ、サセルが附屬するが、一音のものになると、シサセルジサセル、サセル、が附屬する。而して、どの漢語にどの形式が附屬するかわ、容易に一定することが出來ない。つまり、語彙により、場合により、或わ他方によつて、その附屬する形式が區々であるのであるが、その中最も普通のものを擧げて見ると、

今度ワ屹度目的ヲ達シサセテヤリマス。

モウ命令ヲ發シサセマシタ。

コレヲ判ジサセテ見ヨウ。

イソップヲ譯サセル。

コレヲ解サセルノワ中々骨ガ折レマス。

以上受身可能及び使役の三助動詞わ文語の場合と、その活用形を異にして居る。卽ち文語においてわ、何れも下二段に活用するのであるが、現代の口語においてわ、大抵下一段になつて居る。これわひとり助動詞においてばかりでなく、動詞においても同じ關係が存在するので、動詞の下二段のものが大抵下一段に變つ

て居る。尤も下二段の動詞及び助動詞が下一段に變つたのわ、あまり古くわないので、足利時代までわ、口語でも大抵文語のまゝ下二段に用いて居る。狂言記をはじめ、當時の口語で記したものわ、大抵下二段の形式を用いて居ることわ、動詞のところで（一〇七―一〇〇頁參照）述べた通であるが、是によつて助動詞の活用も粗ぼ推測することが出來るのである。即ち以上三助動詞が下一段に變化したのわ、比較的近世のことで、殊に德川時代において大に發達したのである。

つぎに、地方における分布狀態を見ると、文語のごとく、之を下二段に用いて居るのわ、九州一圓で、その以外においてわ、全く下一段に變つて居る。それゆえ、今日でわ下一段形を標準に取つて差支ないのである。

又使役の助動詞の分布を見るに、此助動詞にサセル、サスル、サスの三種ある。その中、サスわ三重滋賀京都奈良和歌山等の近畿地方をはじめとして、中國地方四國地方にも行われているし、サスルわ下二段ノ關係上九州一圓に行われている。その他の地方にわ、すべて、サセルが行われて居るので、分布の上から見れば、サセルが一番廣いのであるから、動詞との關係上之を標準に取るのが至當である。

使役の助動詞が受身の助動詞に連續すると、使役を受ける意味になる。即ち被役の助動詞になるのである。

太郎ガ父ニ手紙ヲ書カセラレタ。

オ花ガ毎日オ母サンノ御用ヲ、務メサセラレル。

此間ワ隨分難儀サセラレタネ。

但し、漢語に附屬する場合にわ、シサセラレル、ジサセラレル、サセラレルの三種が竝び用いられることわ、前例から推測することが出來るのである。

第四節　指定の助動詞

確實に事物を說定する場合に名詞、代名詞等に接續して用いられるダ、ノダを**指定の助動詞**という。

この助動詞にわ、敬意を含むものと、之を含まないものと二種ある。敬意を含むものわ、デス、デアリマス、デゴザイマス、之を含ま

ないものわ、ダ、デアルである。

以上の助動詞わ、名詞、漢語、助動詞、接尾語のあるものとに附屬する。例えば、

近頃　ラソウイウ噂ダヨ。
ソレモ自分デ求メタ罪デス。
日本ワ世界ノ公園デアル。
何デモ人ニ頼ンダノデワ駄目デゴザイマス。
モシイケナカッタラ止メルマデデス。
チョット見タバカリデアリマシタカラ、ヨク解リマセンデシタ。
アシタワ暑ソウデスネ。

以上の助動詞わ、助詞のノを狹んで、動詞、形容詞及び助動詞に連續する。例えば、

犬ガ魚ヲクワエテ居ルハダ。
自分ワソウ　ウコトガ決シテナイト思ウハデアル。
ソレワ全クアノ人ガ惡ルイハダ。
モウ少シ長イノデアリマシタ。
僕ガ確カニ見タノデアル。
アナタワ明日入ラッシャラナイノデスカ、
今年ワ試驗ヲ受ケサセルノデゴザイマショウ。
東京語でわ動詞形容詞から直ぐにダ、デスに連續して、降ルダ、遠イダ、行クデス、アルデス、長イデス、とわ言わないので、必ず助詞のノを插入して降ルノダ、遠イノダ、行クノデス、アルノデス、長イノデスという。但しダロウ、デショウ、に對してわ、直ちに行クダロウ、遠イダロウ、行クデショウ、アルデショウ、長イデショウというのが普通である。

次ぎに、先きに述べた形容動詞の語尾わ、この助動詞と同形のものであるし、準形容詞わ連體形から助詞のノを狹んでこの助動詞に連續するのである。

(一)　形容動詞の場合、

昨日ワ日比谷公園ガ大層賑ダッタ。

アノ邊ナラ隨分靜デアルガ、然シ少シ不便ダロウ。

モウ僅デゴザイマス。

ソレナラマコトニ結構デス。

ソレワ確デアリマスケレドモ……

(二) 準形容詞の場合、

モウ少シ立派ナノダ。

アマリ丈夫ナノデアリマセンガ……

大層靜ナノデスガ、然シアマリヨイコトモアリマセン。

僅ナノデゴザイマスケレドモ、ヤハリ疵ニナリマス。

此ナノデが普通ナンデと發音される。

指定の助動詞わ次ぎの通りに活用する。

現	中止形	終止形	推量形
デ	ダ	ダ	ダロウ

在							
ノ	ダ	ノ	ダ	ノ	ダ	ノ	ダロウ
デシテ	デス	デシ	デス	デシ	デス	デシ	デショウ
ノデアリマシテ	デアリマス	ノデアリマシ	デアリマス	ノデアリマシ	デアリマス	ノデアリマシ	デアリマショウ
デゴザイマシテ	デゴザイマス	デゴザイマシ	デゴザイマス	デゴザイマシ	デゴザイマス	デゴザイマシ	デゴザイマショウ
ノデゴザイマシテ	ノデゴザイマス	ノデゴザイマシ	ノデゴザイマス	ノデゴザイマシ	ノデゴザイマス	ノデゴザイマシ	ノデゴザイマショウ

過							
デ	ダッタ	ノ	ダッタ	デシ	タ	ノデシ	タロウ
ノデアリマシテ	デアリマシタ	ノデアリマシ	デアリマシタ	デシテ	デシタ	ノデシテ	デシタロウ
ノデアリマシタ	デアリマシタロウ	ノデアリマシタロウ	デアリマシタロウ	ノデアリマシタロウ	デアリマシタロウ	ノデアリマシタロウ	デアリマシタロウ

去

デゴザイマシテ	デゴザイマシタロウ
ノデゴザイマシテ	ノデゴザイマシタロウ

指定の助動詞わ、關東と關西とで、少しくその趣を異にして居る。卽ち關東地方で、花ダ、行クノダという場合に、關西地方でわ、花ジャ、行クノジャという。國語調査委員會から出版された口語法分布圖によるとジャ、ノジャを用いる地方わ、中國四國及び九州で、其以外わ殆どすべてダ、ノダを用いて居る。つぎに、デスというのも、恐らく關東方言の系統に屬するものであろうと信ずる。これも現在で わ隨分廣く分布して居る。

それで、ダ、ジャ、デスの發達を見るに、足利時代までわ、ジャというのが最も廣く行われて居て、狂言記をはじめ、その他同時代のものわ、殆どすべてこの形式を用いて居る。而してダわまだあらわれて居らん。然らば何時ごろから此ダがあらわれて來たかというと、足利時代わ勿論德川時代の始にかけてわ、デアルわあるが、ダ、ダロウわ見當らない樣に思われる。德川時代になつてからわ、いろ〳〵のものにダが散見して居るのを見ると、ダの發達わ極めて新しいものと思われる。又デスわ狂言記の中に處々に散見して居るが、しかしながら、德川時代の初世においてわ殆ど見えない樣である。そこで、狂言記のデスわ、今日の口語におけるものとわ、その起源或わ性質が違うという說もあるが、とにかく今日のデスが廣く用いられる樣になつたのわ、明治になつてからであろう。明治以前の江戸語でわ、大抵デアリマスを用いて居たのである。

第五節　推量の助動詞

事物動作或わ有樣を確實に說定しないで、之を推量するために名詞、形容詞、動詞等に接續して用いられる、ダロウ、ラシイを**推量の助動詞**という。

ダロウわ名詞、漢語と動詞、形容詞、助動詞の終止形とに連續する。

アシタワ多分雨ダロウ。
アノ人ワタシカ大尉ダロウ。
君ワ酒ガ大分イケルダロウ。
彼ノ人ワ隨分苦シイダロウ。

僕ワ殘念ダガ行カレナイダロウ。

つぎに、ラシイわ動詞、形容詞及び助動詞の終止形に連續する。

明日ワ雨ニナルラシイ。

見ルモノワ何モナイラシイ。

獨逸語ナラ讀メルラシイ。

但し名詞に續くラシイわ接尾語であるから、是と區別しなければならん。

ラシイの活用わ形容詞とほぼ同一である。即ち、ラシク(ラシウ)、ラシイと活用するのであるが、然し、ラシケレバという假定形がない。過去の形式にラシカツタがあるが、推量の形式のラシカロウわない。

動詞の時(テンス)と法(ムード)とわ、常に相關聯しているものであるが、殊に未來と推量とわ殆ど區別し難い場合が多い。普通一般の場合にわ、未來形の用いられることが誠に少いので、この場合にわ、大抵推量の助動詞を用いて居るのである。

第六節　希望の助動詞

希望或わ願望の意を表彰するために動詞に結び付けられるタイを**希望の助動詞**という。

此のタイわ動詞の連用形に連續するので、たとえば、

水ガ飲ミタイ。

相撲ヱ行ッテ見タイ。

今年コソ是非高等學校ヱ入リタイモノダ。

これわ形容詞と全く同一の活用をする。即ち

副詞形	終止形	連體形	假定形
行キタク(ウ)	タイ	タイ	タケレ(バ)

副詞形からゴザイマスに連續する時に、長音に變化するのわ、形容詞の場合と同一である。但し、この場合にわ、語根まで變化し

僕ワ殘念ダガ行カレナイダロウ。

つぎに、ラシイわ動詞、形容詞及び助動詞の終止形に連續する。

明日ワ雨ニナルラシイ。

見ルモノワ何モナイラシイ。

獨逸語ナラ讀メルラシイ。

但し名詞に續くラシイわ接尾語であるから、是と區別しなければならん。

ラシイの活用わ形容詞とほぼ同一である。即ち、ラシク(ラシウ)、ラシイと活用するのであるが、然し、ラシケレバという假定形がない。過去の形式にラシカツタがあるが、推量の形式のラシカロウわない。

動詞の時(テンス)と法(ムード)とわ、常に相關聯しているものであるが、殊に未來と推量とわ殆ど區別し難い場合が多い。普通一般の場合にわ、未來形の用いられることが誠に少いので、この場合にわ、大抵推量の助動詞を用いて居るのである。

第六節　希望の助動詞

希望或わ願望の意を表彰するために動詞に結び付けられるタイを**希望の助動詞**という。

此のタイわ動詞の連用形に連續するので、たとえば、

水ガ飲ミタイ。

相撲ヱ行ッテ見タイ。

今年コソ是非高等學校ヱ入リタイモノダ。

これわ形容詞と全く同一の活用をする。即ち

副詞形	終止形	連體形	假定形
行キタク(ウ)	タイ	タイ	タケレ(バ)

副詞形からゴザイマスに連續する時に、長音に變化するのわ、形容詞の場合と同一である。但し、この場合にわ、語根まで變化し

てタクがトウになる。

白縮緬一匹買ッテ來テ頂キトウゴザイマス。

私モ御一所ニ御伴致シトウゴザイマス。

希望の助動詞に就て、一の注意すべきことわ、芝居ガ見タイ、水ガ飲ミタイという樣に、助詞のガの下に用いられるのが、東京語の習慣であるということである。これわ芝居ヲ見タイ、水ヲ飲ミタイという樣にヲの下に用いられるべき筈であるのに、東京語でわ、以上のごとく使用されるのである。

第七節　時の助動詞

時の觀念わ大別すると、過去現在未來の三範疇になるのであるが、更にそのおの〳〵の範疇に、過去現在未來があるのであるから、すべてで九種になる譯である。しかし、これわ論理的に時の範疇を區別した場合で、文法上に普通あらわれて居る時の形式わこれと少しく趣を異にして居るのである。

動詞にわ動作狀態及び存在の三種あるので、その各の上に等しく時の現象が存在するのである。

一　現在の時

現在の時（テンス）わ動詞の終止形を以てそのまゝ表彰されるので、此場合にわ、時の助動詞の補助を受けないのである。卽ち、

(一)　動作の場合、

水ガ流レル。

人ガ大勢來ル。

風ガ烈シク吹ク。

(二)　狀態の場合、

花ガ大層咲イテ居ルネ。

學校ガモウ始ッテ居ル。

雨ガ降ッテオル。

(三)　存在の場合、

子供ガ澤山居ル。
猫ガ庭ニ居ル。
林檎ガ盆ノ上ニアル。

現在の時において、注意すべきことわ、先きに動詞のところにおいても述べた通り、動作を表示する動詞の終止形わ必しも現在の意味でわなくして、未來にも用いられるし、又時の觀念から離れても用いられるということである。たとえば、人ガ大勢來ルというのわ、現在大勢の人が來つゝある意味にも用いられるし、明日の宴會に大勢の人が來る筈であるという意味にも用いられる。又、試驗ヲ受ケルというのわ、現在試驗を受ける覺悟であるという意味にもなるし、現在でなくして將來の意味にもなる。それゆえに、現在の時わその形式上から見ると、極めて曖昧なものである。

つぎに、科學における原則或わ定理のごときもの、又格言のごときものわ、時に關係なくして言いあらわされる。即ち以上の場合わ、常に動詞の終止形を以て言いあらわされるのである。

空氣ノ密度ワ高サニ反比例スル。
事物ノ名稱ワ名詞デアル。
人間ワ萬物ノ靈長デアル。
長イモノニワ卷カレル。
出ル杭ワ打タレル。

つぎに、歷史的現在(historical present)というものがある。是わ歷史上の出來事を敍述する際に、常に過去の時を用いるのわ、頗る繁瑣であるし、且つわ修辭上の必要もあるので、現在の形式を用いるのが習慣になつて居る。つまり過去の出來事を現在の形式で表彰するのである。しかし、文語に比すると、口語にこの時を用いることが遙に尠い。

義經ノ家來ニ武藏坊辨慶トイウエライ人ガアリマス。

白倉源五左衞門トイウ者ガ道場ヲ開イテ、諸士ニ劍術ノ指南ヲ致シテ居マス。

豐臣秀吉ガ天下ヲ一統シタ頃ノコトデゴザイマス。

つぎに、進行現在(progressive present)と稱するものがある。文語でわ、見ッ、走リッ、のごとく、動詞にッ、を連接して、之を表彰するのであるが、口語にもこの形式わしば〳〵用いられるが、然しながら、口語においてわ、狀態を表示する形式で、普通之を示す慣例である。例えば、

雨ガ大層降ッテイル。

子供ガ庭ニ遊ンデオル。

火ガ盛ニ燃エテオル。

然るに、東京語における此テイル、テオル、デイル、デオルわ必しも進行現在ばかりでなく、狀態を表示することもある。卽ち雨ガ大層降ッテイルわ、今現に降りつゝある意味にもなるし、又今わ晴れて居るが、既に降つた狀態を示す意味にもなるので、進行現在と狀態との區別わ、東京語でわ屢々不明である。ところが、關西方言でわ、この間の區別わ明に存在して居るので、例えば、進行現在の場合にわ、

雨ガ降リオル。

猫ガ死ニオル。

火ガ消エオル。

と言ッて、單ニ狀態を示す場合にわ、

雨ガ降ットル。

猫ガ死ンドル。

火ガ消エトル。

と言うのである。雨ガ降リオルわ今降りつゝあるのであるし、猫ガ死ニオルわ今や死につゝあるのである。つまりその動作が進行しつゝあるのである。然るに、猫ガ死ンドルと言えば、す

でに動作が結了して、死の狀態を示して居るのである。火ガ消エトルと言えば、火が消滅してしまつて居るのである。この區別わ關東方言でわ出來ないので、關東方言にわ死に瀕して居る場合を、死ニカケテ居ル、火の消えつゝある場合を、消エカケテ居ルという形式があるが、然し是にわ進行的の意味がない。

關東方言におけるティル、テオル、デイル、デオルが普通談話の際にわ、テル、デル、と言い、關西方言における降リオル、死ニオルわ、降リヨル、死ニヨルと言う。

二　過去の時

過去の時わ助動詞テ、タ、デ、ダを動詞に連接して、之を表彰する。

即ち、

(一)　動作の場合、

昨日大森エ行ッテ海水浴ヲ爲タ。

モウ花ガスッカリ散ッタ。

(二)　狀態の場合、

昨日入谷エ行ッテ見タラ、朝顏ワ大分咲イテ居タ。

甲君ガ乙君ニ連リニ周旋ヲ賴ンデ居マシタ。

(三)　存在の場合、

一昨日日比谷公園ニ音樂ガアッタ。

先刻甲君ヲ尋ネタラ宅ニ居ッタ。

イッカオ話ノモノワ國ノ方ニゴザイマシタ。

このテ、タ、デ、ダわ**過去の助動詞**で、次ぎのごとく活用する。

連用形	終止形	連體形	推量形
テ	タ	タ	タロウ
デ	ダ	ダ	ダロウ

この過去の助動詞が條件を示すときの、タラ、ダラわ假定ばかりでなく、既定の意味を表彰する場合もある。たとえば、昨日行ッ

タラ留守ダツタ、酒ヲ飲ンダラ身體ヲ悪クシタノタラ、ダラわ既定であるし、今日ワ雨ガ降ルカラ明日行ツタラ何ウダ、モウ少シ勉強シタラウマク行クダロウのダラわ假定である。

文語でわ、既定と假定の區別わ、形式上ほゞ明瞭である。雨降レバ、勉強スレバわ既定で、わ既定で、行キタラバ、咲キタラバわ假定である。雨降ラバ勉強セバわ假定である。ところが、口語でわ、この區別が殆と不明になつた。例えば、咲キタレバも咲キタラバも、等しく咲イタラというし、雨降レバも雨降ラバも、同じく雨ガ降ツタラという。つまり、假定か既定かの區別わ、前後の關係から判斷しなければならんのである。

推量形のダロウ、ダロウわ、動詞の連用形に連續するので、例えば、昨日船ガ着イタロウ、モウ彼ノ人ニ賴ンダロウという様に用いられるのである。動詞の終止形に連續するダロウわ、推量の助動詞であるから、それと連用形に連續する過去のダロウとわ、性質が全く違う。

過去の助動詞わ文語にわキ、ケリ、タリ、ツ、ヌ、セリ、タリケリ、タリキ、ニケリ、テキ、ニキ等種々あるのであるが、然るに、口語でわ、テ、タ及びその系統に屬するものばかりになつた。これわ文語における過去の助動詞と、口語における過去の助動詞との大きな相違である。

體時（テンス）と法（ムード）の關係わ極めて緊密で、その間の區別が容易につかんことが多い。それで、過去の形式わ法の上から見ると、決定或わ既定の意味になる。或る人から何か受取つて、確ニ受取リマシタと挨拶するときのマシタわ既定の意味で、之を過去として取扱うことが出來ない。又勉強スレバ及第セムという形式わ、單に時の關係から見れば、破格であろう。何となれば、勉強スレバわ現在で、及第セムわ未來である。それと同じ様に、明日雨降ラバ行カズというのも、破格でわろう。然しながら、若し之を法の關係から見れば、必しも破格でなくして、思想上正確なものとして、成立つのである。であるから、時間の關係と動作行爲の關係とわ、常に注意して區別しなければならんので、これがためにやゝもすると、一大誤謬を來すことがあるのである。

三　未來の時

未來の時わ助動詞ウ、ヨウを動詞に連接して、之を表彰する。（動詞活用形ノ部參照）而して、五段活用の動詞にわヨウを結び付ける。

このウ、ヨウを**未來の助動詞**という。然しながら、全く活用しないのわ此助動詞の特質である。

(一)　動作の場合、

僕モ一所ニ行コウ。

明日書コウ。

(二)　狀態の場合、

入谷ノ朝顔ワモウ咲イテ居マショウ。

子供ワ大方寢テ居マショウ。

(三)　存在の場合、

明日ワ宅ニ居リマショウ。

來月ワ必ズアリマショウ。

午後ナラゴサイマショウ。

未來の時の形式わ、想像或わ推量の形式と粗ぼ同一で、その間の區別の困難なものが尠くないのである。然しながら、未來の時を表彰する場合にわ、大抵未來時の副詞或わ未來時の意味を表彰する副詞がある樣である。例えば、明日書コウ、午後ナラゴザイマショウの『明日』『午後』のごとき副詞がその一例である。

四　完了の時

過去、現在、未來の時の外、それと同時に動作の完了を表彰する形式がある。例えば、文語ニおいてわ、

行キタリ　現在完了

行キタリキ　過去完了

行キタラム　未來完了

という樣な言いあらわし方がある。英語においても、

I have been loved　現在完了
I had been loved　過去完了
I shall have been loved　未來完了

がそれに相當するのである。然るに、口語においてわ、普通の時と完了の時との區別が判然存在しない樣であるが、けれども、全然存在しないということも出來ない。卽ち、英語において have 我邦の文語においてタリが完了の時を表彰する樣に、口語において、ラシマウが粗その意味を表彰するのである。卽ち、

御飯ヲ食ベタ　現在完了
御飯ヲ食ベテシマッタ　過去完了
御飯ヲ食ベテシマッタロウ　未來完了

がその例であろう。現在完了と過去の區別がないが、これわ英語においても、I loved が過去にもなり現在完了にもなると同一に見てよろしい。普通の時と完了の時との區別わ、未來完了の場合に最も明瞭である。例えば友人ニ妨ゲラレナカッタラ、明日の晝マデニ、此本ヲ讀ンデシマッタロウニというのが、未來完了である。單に此本ヲ讀ンダロウというのわ過去の推量であるから、未來の完了わテシマッタロウが連接しなければ明に表彰することが出來ないのである。

第八節　敬語の助動詞

目上の人に對して尊敬の意を表せんとする場合、或わ、謙讓の意を表せんとする場合にわ、動詞に一種の助動詞を結び付ける。この助動詞を**敬語の助動詞**という。

敬語の助動詞わ更に、尊敬と謙讓の二種に細別せられる。

一　尊敬の助動詞

尊敬の助動詞わ相手の動作を尊敬して言いあらわす場合に用

いるので、これに又三種ある。その第一わ專ら動詞にレル、ラレルを連接するもの、第二わナサル、下サル、アソバス等のごとく、元來わ動詞であるが、これを助動詞に轉用して、動詞に連接するもの、その第三わニナルが動詞に連接するものである。

(い)　レル、ラレルを連接するもの、

此レル、ラレルわ元來可能の助動詞であるが、それが一轉して敬意を表する助動詞になつたのである。それゆえ、レルわ五段活用の動詞の否定形、ラレルわその他の活用の動詞の否定形に連續するのわ、可能の場合と同樣であるし、活用の形式も同樣である。

十日頃横濱エ着カレル。
先生ワヨク生徒ノ世話ヲサレル。
昨日嚴シク談ジラレタ。

局長ワイツモ毎朝早ク來ラレル。
今度ワ一切僕ニ任セラレル筈ダ。

(ろ)　ナサル、下サル、アソバス等を連接するもの、

ナサル、下サル、アソバス等わ動詞として用いられる時に、既に敬意を含んで居るものであるが、それが、やがて尊敬の助動詞として轉用されることがあるのである。たとえば、

御飯デモオアガリナサッテ、ユックリ遊シデ入ラッシャイ。
ソノ邊チョットゴ散歩ナサッテワ、如何デス。
先生ワ何時モ朝五時ニオ起キナサル。
ゴ親切ニオ尋ネ下サッテ、難有ウゴザイマス。
チョットオ待チ下サイ。
アナタ今日ノ新聞ヲオ讀ミ遊バシマシタカ。
少シ待ッテイラッシャイ。

ナサル、下サル、アソバスわ名詞、漢語及び動詞の名詞形に連續す

るので、此場合にわそれらの名詞、漢語及び動詞にオ或わゴという敬意を有する接頭語を附け加えるのが普通である。

動詞にレル、ラレルの附屬する場合にわ、その動詞に以上のごとき接頭語の附け加わることがない。

つぎにナサル、下サルの活用形を表示すると、

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ナサラ(ナイ)(ン)	ナサツ(テ)	ナサル	ナサル	ナサレ(バ)	ナサイ
下サラ(ナイ)(ン)	下サツ(テ)	下サル	下サル	下サレ(バ)	下サイ

命令形を除いてわ、粗ぼ五段活用と同一であるが、但し人により、地方によつて、連用形に下一段の活用形を混ずることがある。アソバスわ少しく貴族的で、今日でわあまり用いられない。イラッシャルわ元來居ル、來ルの意味に用いられる動詞で、その語自身において、既に敬意を含んで居るのである。然るに、此語わ動詞が狀態を表彰する場合に、助動詞として用いられるのであるが、狀態を表彰する動詞を一語として取扱う上から見ると、イラッシャルの附屬する場合も同じく一語として取扱うことが出來る譯で、從て、之を助動詞として分離して取扱わなくともよろしい。

(は)　ニナルを連接するもの

東京語でわ、ナサルを連接して敬意を表する場合に、ニナルを連接することが多い。例えば、

今月ノ末ニ横濱ニオ着ニナリマス。
甲君ヲオ尋ネニナリマスカ。
鎌倉エオ出ニナル。
書生ヲ急イデオ呼ビニナッタ。

という樣に用いられるのである。

以上の場合に、オ着、オ尋、オ出、オ呼の語性わ何であるかゞ、一の研究すべき問題であると思う。何となれば、何れも助詞のニを受けて居るのであるから、名詞と見ることが出來るが、一方において、書生ヲ、甲君ヲのごとく、目的語を受けることもあるから、此場合にわ、動詞と見なければならん。然しながら、何れにしても、純

粹の名詞でもなく、動詞でもなく英文典におけるgerundに粗ぼ似寄つたものである。それゆえ、それとにかく之わ名詞性の動詞と見るのが適當であろう。

二　謙讓の助動詞

謙讓の助動詞わ自分の動作を卑下して言いあらわす場合に用いるのである。此場合にわ、動詞より一轉したイタス、モウス、モウシアゲル、ツカマツル等を其助動詞として用いるのである。

例えば、

マダオ伺致シマセンデ、失禮致シマシタ。
宅デオ待受イタシマショウ。
ソレデワ御遠慮ナク頂戴イタシマショウ。
御手紙ワ今朝拜見イタシマシタ。
オ待タセ申シマシテ失禮。
私カラオ話申シマショウ。
私ガ御案内申上ゲマショウ。

大勢參上仕リマシテサゾ御迷惑デゴザイマショウ。

此等の助動詞わ動詞の連用形或わ名詞や漢語に連續する。尤も動詞の中、カ行變格活用と、サ行變格活用わ謙讓の場合に用いられないから、例外である。此等變格活用の動詞の代りに他の語が專ら用いられる。

三　丁寧に言いあらわす場合

すべて丁寧に言いあらわす場合にわ、動詞或わ助動詞にいつもマスを附け加える。一體尊敬の意を表する場合わ、以上のごとく三種あるが、何れの場合に於いても、マスを附け加えるのが必しも必要な條件でないのわ、以上に例示したところで明であろう。然るに、謙讓の意を表する場合に於ても、今申上ゲタ、ソンナラ頂戴致ソウカという樣に、マスを附け加えない場合もあるが、然しながら、大抵之を附け加えるのが、一般の慣例である。是わ

畢竟謙讓の場合にわ、丁寧に言いあらわす意味があるからであろう。それゆえ、丁寧に言いあらわす場合にわ、尊敬の場合にも、謙讓の場合にも、マスを附け加えるのわ勿論であるが、それらの意を表わす必要のない目下のものに對しても、マスを附け加えるのである。例えば、

今歸リマスカラオ待ナサイ。

オ前ワ何時コヽエ來マスカ。

上野ノ博物館エ行キマシタカ。

という様な言葉遣わ、目下のものに對しても、用いられることがあるのである。

マスの活用形わ現在五段活用と、サ行變格活用とが、混じて居る。例えば、

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	未來形
マセ（ン）	マシ（テ）	マス	マス	マセ（バ）	ママシセ	マシヨウ
マセ（ン）	マシ（テ）	マスル	マスル	マスレ（バ）	ママシセ	マシヨウ

以上の形式が互に混じて居て、未だ一定の習慣が成立たない様に思われる。つまり人により、場合により、地方によつて、區々であるのであろう。

尊敬及び謙讓の意を表する形式わ、粗ぼ以上の通であるが、一體この言葉遣わ待遇法によつて定まるものである。そのことわ既に代名詞の部において委しく説明したが、つまり代名詞、助詞、助動詞、或わ接尾語等が、互に相呼應して、はじめて言葉遣が完全になるのであるから、此點についてわ殊に甚深なる注意を要するのである。

第九節　否定の助動詞

動作或わ有様を打消すために動詞に結び付けられるン、ナイを

否定の助動詞という。ナイわつぎのごとく活用する。

副詞形	終止形	連體形	假定形
取ラナク	＝ナイ	＝ナイ	＝ナケレ（バ）
出來ナク	＝ナイ	＝ナイ	＝ナケレ（バ）

但し良行五段活用のアルにわ、このナイが附屬しない。語を換えていえば、有の否定としてわ、通常形容詞のナイが用いられて、アラナイ、アランという形式わ、今日の口語にわ全く用いられないのである。

サ行變格活用の動詞に、否定の助動詞が連續するときに、シナイ、センの二種の形式が成立つので、シン、セナイというのわ、或る方言を除いてわ普通用いられない。

文語における否定の助動詞ズ、ヌ、ネが、口語の上にも、しば〳〵用いられる。例えば、物モイワズニ聞イテ居ル、何モ出來ズニ威張ッテ居ル、何處エモ行カズニ引籠ッテ居マス等のズである。

是わ文語における用例がたま〳〵口語の上に殘って居るものと見てよろしい。殊に絶エズアル樣デス、思ワズ笑ッタ、アタラズサワラズニ爲テオイタ、食ウヤ食ワズニ働イテ居ル等わ、副詞か或わ慣用の語句であるから、文語における用ものをそのまゝ用いておるものとして取扱って差支ないのである。

又、酒モ飲マネバ、菓子モ食ベナイ、何ウカ失敗セネバヨイガ、早クセネバナラン等のネバわ關西地方にしば〳〵用いられる形式であるが、しかしながら、今日の標準語としてわ之を避けたいと思う。

つぎに、行クマイ、降ルマイ、受ケマイ、來マイなどのマイわ推量の助動詞であるが、しかしながら、いつも否定して推量するのであるから、否定の助動詞の一種と見て差支がない。

以上否定の助動詞としてわ、ナイとンの二種、それに推量のマイを加えて、三種になるのであるが、然るに現今ナイとンの用いられる地方に、判然たる區別が

あるのである。即ち、ナイ、ナカッタを專ら否定の形式として用いるのわ、關東方言分布の地方であるし、ンナンダを專ら否定の形式として用いるのわ、關西方言分布の地方である。尤もナイとンわ兩方言において近來漸々混用される傾向をあらわして居るが、ナカッタとナンダわ、兩方言において、猶判然たる區別があるのである。けれども、既に分布上斯くのごとき廣汎なものわ、一方を取つて一方を捨てるということわ策の得たものでないから、暫く之を並用するのが穩であろうと思う。

つぎに、標準語として關東方言を選定したのであるから、其點から見れば、ナイ、ナカッタを唯一の標準とするのが然るべきことであるが、しかしながら、ンナンダわ分布の地域も廣汎であるし、其發達から見ても、強ち之を捨て難いのである。發達上ナイ、ナカッタとンナンダとどちらが古いかというと、言うまでもなくンナンダの方が遙に古い。狂言記をはじめ、足利時代以降の口語にわ、一般ンナンダが用いられて居て、ナイ、ナカッタが見當らない。彼の『お安物語』に「ソンナニコワイモノデハアラナイ」というのが見えて居るが、これらがナイの用例として、先づ古いものであろう。狂言記にわオリナイという語が澤山散見して居るが、しかしこれわゴザナイなどと同じく、形容詞のナイで、助動詞のナイでわないのである。それで關東方言におけるナイ、ナカッタわ德川時代になつて、だんだんあらわれておるが、それでも元祿以前のものにわ、あまり散見しない。松平信興の著である『雜兵物語』に、助動詞のナイが澤山散見して居る。この物語わ信興の著とすれば、元祿以前のものたることわ勿論であるが、しかるに、これわ專ら關東方言で兵卒の心得方を說明したものである。この前後から追々種々の文學にナイの用例があらわれておるのであるが、此等の用例から見ると、ナイ、ナカッタわ專ら德川時代に至つて發達したもので、而かもこの發源の地わ、關東であつたろうと思う。此等わ未來形のヨウの發達と相關聯して、恐らく誤のない判斷であろうと思う。

つぎに、ナイ、ナカッタの語源が何であるかについてわ、種々の說があるのである。一體、打消即ち否定の形式として古來あらわれて居るものを擧げて見ると、

(1) ずぬね

(2) に

(3) じ　まじ
(4) なく
(5) なふ　なへ
(6) なし

等である。然るに、ナイがズ、ヌ、ネ、ニ、ジ、マジ等のあるものから發達したものとわ考えられない。然らば、第四のナクからわ何うかというと、これわ萬葉に、

うぢま山朝風寒し旅にして、衣借すべき妹もあらなくに。

もゝしきの大宮人のにぎたつに、船乘りしけん年のしらなく。

などゝあるので、此ナクの轉じたものであろうという説がある。アラナクもシラナクも、皆打消の意味であるから、之わ一説として取ることが出來る。

つぎに、第五のナフ、ナヘわ何うかというと、これわ萬葉集の東歌及び關東地方出身の防人の歌にのみ見えて居るものである。即ち東歌に、

武藏野のをぐきか雉子立別れ去にし雷より脊ろに逢なふよ。　武藏國の歌

伊香保せよ奈可中次下おもひどろくまこそしつと忘れせなふも。　上野國の歌

きはつくの岡のくくみられわれつめど、籠にも滿たなふせなとつまさね。　雜歌の中の歌

畫解けば解けなへ紐のわがせなに、あひよるとかも夜とけやする。　相聞の中の歌

對馬のねはしたぐもあらなふかむのねに、たなびく雲を見つゝ忍ばも。　仝　上

ををごものふの短くて逢なへば、おきつまかものぬきぞわかする。　仝　上

みくくぬに鳴のはほのすころが上に、ことおろばへて未だ寢なふも。　仝　上

とやの野になさぎねらはりをさ〳〵も寢なへ兒ゆゑに母にころばえ。　仝　上

つぎに、下野都賀郡の防人の歌に、

つくひやはすぐはゆけどもあもしゝが、玉の姿は忘れせなふも、

と見えて居る。此等わ寢ナフモ、忘レセナフモのごとく、終止にも、解ケナヘ紐、逢ナヘバのごとく連體或わ已然にも用いられて居るので、即ちナフ、ナヘという樣に活用する語である。而して、此形式わ東歌或わ關東地方出身の防人の

歌にのみ見えて、他にないのである。これらの事情から推して、ナイの前身と見ることが出來るかも知れん。然しながら、萬葉時代に關東地方に行われて居た此形式が、その後の文學にわ全くあらわれないで、遙か後世に至つて、口語の上にあらわれて來たということわ、よほど信じにくいのである。

然らば、第六のナシからわ何うかというと、此ナシわ形容詞であつて、打消として動詞や助動詞に連續することわ嘗てないのである。けれども、これが他の類例に促されて助動詞として用いられる樣になつて、關東方言のナイ、ナカッタが發達したものと見ることが出來る。自分わ寧ろこの説に贊成するので、學友新村出君も嘗て教育學術界（第十卷第六號）においてこの説を主張されておる。

一體ナク、ナクニのナ、ナフ、ナヘのナ、ナ＝ッのナ、形容詞のナシのナ、及びズ、ヌ、ネ、ニのヌ、ネ、ニ等わすべて打消の意味を有する同一語根の者であるまいか。猶一歩を進めて考えれば、ナク、ナクニ、ナフ、ナヘ、及び形容詞のナキ、ナシ等わ全く同一物と見ることが出來るだろうと思われる。契沖の萬葉集代匠記にわ、ナフとナクわ全く同一のものだと説いて居る。すでに形容詞のナシも地方によつて、其形式に多少の相違があつて、東歌にも遠カドモ、遠カバ、戀シケバ、悲シケ兒ラ、アゼカ悲シケのごとき形式が見えて居る。東歌以外においても、君ナケナクニのごとき形式もあるのである。それゆえ、斯の如き形式の相違、或わ、ナキ及びナシの相違わ古代における方言の差によつて、説明が出來るのであろうと思うが、これと同じく、ナク、ナフ、ナシ等わ素わ同一語源であるが、方言の差によつて、斯の如く分岐したものと見ることが出來るであろう。然し、これわ未だ言語學的に證明するまでに至らないから、暫く假定説として差し置いて、現在のところ關東方言のナイ、ナカッタわ、ナク、ナフ、若くわヌから發達したものでなくして、形容詞のナシが助動詞に變化して、動詞にも連續する樣になり、而して否定の助動詞に發達したものと見たいのである。それで、動詞に連續する狀態を見るに、ナフ、ナヘ、ナクわズ、ヌ、ネと同じく、すべて動詞の否定形即ち將然形に連續するので、例えば、滿ナフ、寢ナフ、アラナフ解ケナヘのごとく、或わ、知ラナク、思ハナク、見エナク、アラナクニのごとく、連續するのである。それゆえ、此點においても、ナク、ナフ及びヌ等わ同類のものであつたろうということが考えられる。然しながら、これらのものがナイ、ナカッタの前身たることを證明するについて、一の物足らぬことわ、これらのものの用例を見るに、何れ

も現在の形式のみで之を基礎とした過去或わ未來の形式わ古來その用例を見ないのである。それゆえ、これらのものからナイ、ナカッタが發達したと見ることが少しく困難である。それでナイ、ナカッタの前身わ形容詞のナキ、ナシであると見たいのであるが、然しながら此說を成立たしめるにわ、形容詞のナキ、ナシが助動詞に變轉して、動詞に連續するに至るまでの例證を擧げなければならん。然るに、その實例わ、宣命の中に、

すめらがみかどまもり仕奉ること顧みなき人。

萬葉集防人の歌に、

けふよりは顧みなくて大君のしこのみたてと出でたつわれは。

とあるし、平家物語などにも許サレナケレバいう樣なものが散見して居る。然しながら、此等の用例を見ると、何れも名詞の性質を帶びて居るのであるから、ナキ、ナケレバというのわ、形容詞を去ることあまり遠くないものである。それから、狂言記にしば〳〵散見して居るオリナイ、ゴザナイなども、やはり名詞性のものに附屬して居るのであるから、純粹の助動詞と見ることが出來ないのである。然しながら、何れ名詞性の者としても、動詞としての觀念わ多少存在して居るのであるし、のみならず、これらの性質の者に附屬したものがしば〳〵用いられるに從て、その類推作用の勢力がその範圍を擴張して、動詞にも附屬する樣になるのわ、敢て珍しいことでわないのである。お安物語に見えて居るアラナイわ、オリナイ、ゴザナイなどの類推によつて出來たものであろう。一旦斯のごとき用例が出來上ると、それから後わズン〳〵發達して行くものであるから、その手續によつて段々此ナイが一般の動詞に附屬する樣になつたのであろう。關東方言におけるナイの用例を見るに、行カナイ、行ナカッタ、行カナケレバ、行カナカッタラ、行カナカッタロウという樣に用いられるのが、全く形容詞のナイと同一である。ナク、ナフを前身とすればこれらの用例の發達を說明することがちよつと困難であるが、形容詞のナキ、ナシを前身とする側の說でわ、すべての方面において、あまり困難を見ずに、穩かに解けるのである。

否定の形式についてわ、關東東北地方わ、概ねナイ、ナカッタで、他の形式がないのであるが、關西地方から九州地方においてわ、大體ン、ナンダである。然し、その他に猶種々の形式が行われて居る。例えば、行カンカッタ、行カザッ

タ、行カダッタ、行カンジャッタ、行カイデ等である。

關東方言のナイ、ナカッタの前身わ以上のごとく、形容詞のナイ、ナカッタと見ることが出來るが、關西方言のン、ナンダの前身わ、何んであろうかという と、其ンわヌの轉訛したものであるのわ、固より云うまでもない。ところが、ナンダわヌの過去形と見ることが出來ない。行カナンデ、行カナンダという用例から見ると、行カナンデわ行カナイデ或わ行カナクテ等の轉訛したものの樣にも解けるが、然し、行カナイデ、行カナクテわ關東方言の系統に屬するもので、關西地方にわ全く見ることの出來ないものである。それゆえ、行カナイデ或わ行カナクテの轉訛したものと見ることわ、出來ないのであるから、つまりナンダの前身わ今日のところ全く不明に屬するのである。

第十章　助詞

助詞わ常に他の語に連接して、專ら語句の關係を說定し、或わ種々の文意を表明するものである。

助詞わ各種の品詞に附屬するもので、名詞、代名詞及び數詞に連接して格(case)と同じ樣な職分をあらわすことがある。又格という樣な文法的職分ばかりでなく、時間空間或わ原因結果に屬する論理的關係を表彰することがある。動詞、形容詞などに連接して、種々の樣態(mode)を表彰することもあるのであるし、或わ語句を接續してその間における關係を表彰することもある。つぎに、助詞わ他の語に連接する事情に原いて、數種に類別することが出來るが、然しながら、これにわその類別法によらないで、その箇々について專らその用例を說明しよう。

今日いわゆる助詞と稱して居るものの內容わ、人々によつて多少異るのであるが、その主なるものを擧けて見ると、凡そつぎの通り、

ガ　ノガ　ノ　ニ　ノニ　ヲ　ノヲ　ト　エ　ヨリ　カラ

マデ　デ　ノデ　モ　ノモ　ニモ　サエモ　カラモ　ヨクモ　エモ

ユソ　サエ　ノミ　バカリ　ダケ　キリギリ　ホド　ホカ

シカ　クライグライ　ドコロドコ　ワ　ノワエワ　トワ　カラワ
ヨリワ　マデワ　バ　テ　テモ　モノ、　ナラ　ノナラ
モノナラ　シテ　トモ　ナリ　タリダリ　シ　ヤ　ヤラ　ノ
ヤラ　ダノ　カ　ノカ　モノカ　ナ　ナガラ　ツ、

つぎに、以上の順序に従つて、其用例を説明しよう。

一　ガ

此助詞にわ次ぎの様な用例がある。

(一)　體言及び其類性のものに附屬するもの、

風ガ吹ク。

遠クガ見エル。

ソンナヤラセテ見ルガ宜イ。

コレバカリガアノ人ノ取柄ダ。

(二)　ヲというべき場合に用いられるもの。

氷水ガ飲ミタイ。

芝居ガ見タイ。

馬ニ鹽俵ガ附ケテアリマシタ。

コツブガ盆ニ載セテアリマス。

(三)　專ら語句を接續するもの、

佐渡ガ島。

五十錢ガモノ。

京都エ行キマスガ、何カ用ガアリマセンカ。

獨逸語モ讀メルガ、英語モ讀メル。

(四)　シカシナガラの意味で、語句を接續するもの、

隨分勉强シタガ、入學ガ出來ナカツタ。

天氣ワ宜イガ、風ガ寒イ。

兄弟ワ多イガ、皆女バカリダ。

折角オ出ヲ願イマシタガ、何ノ風情モゴザイマセン。

一晩考エマシタガ、何ウモヨク分リマセン。

(五)二の語句を重ねる場合に用いられるもの、

アロウガアルマイガ構ワン。

行コウガ行クマイガ、コッチノ勝手ダ。

(六)慣用の語句として用いられるもの、

十年ガ百年カ、ツテモ志ヲ達セズニワ置カン。

今ガ今マデ知ラズニ居タ。

二　ノガ

此助詞わ體言の代りに其意味をあらわし、或わ、その附屬する語句を體言の如き性質に化する力を有する。ノニ、ノヲ、ノモ等もやはり同樣で、これわつまりノに特有な力である。

(一)代名詞に附屬するもの、

僕ノガコレデス。

君ノガアレデヌカ。

(二)用言に附屬するもの、

帆掛船ノ來ルノガ見エル。

君ガダマサレタノガ惡ルイ。

私ワ目ガ見エンノガ悲シウゴザイマス。

長イノガ宜イジヤナイカ。

行キタイノガ山々デスガ、少シ都合ガアリマスカラ……。

三　ノ

文語においてわ、此助詞が英語などの主格(nominative case)に相當する場合に用いられることがあるが、口語においてわ、其用例が殆ど消滅してしまつた。但し雨ノ降ル晩、風ノ吹ク日、小兒ノ着ル衣服、兼好法師ノ言ツタ言葉という樣に、雨ノ降ル、風ノ吹ク、小兒ノ着ル、兼好法師ノ言ツタという文が、其下の語を形容する職分をあらわす場合にわ、文語と同じ樣に用いられることがある。然し、此場合においても、口語でわ雨ガ降ル晩、風ガ吹ク日という樣に用いられることが、多くあるのである。

つぎにガ、ニ、ヲ、ト、モ等ガ用言ニ附屬する場合に、其中間にノを插入して、ノガ、ノニ、ノヲ、ノト、ノモという樣ニ用いるのわ、足利時代までわなかつたのである。是わ恐らく德川時代に至つて起つて來た慣用であろうと思う。

(一) 語句を接續するもの、但し、これに英語などの領格 (genitive case) に相當する場合に用いられるものと、上の語句がノを帶びて、下の語句を形容するものとある。

僕ノ衣服。弟ノ妻。母ノ面影。
木ノ葉。松ノ枝。櫻ノ花。田舍ノ人。心ノ中。上等ノ品物。
森川町ノ宮裏。大森ノ不入斗。東京ノ日比谷公園。
源ノ頼朝。平ノ清盛。紀ノ貫之。
種々雜多ノ原因。ドコカノ人。イツマデノ猶豫。
水入ラズノ仲。何ヨリノ品物。ソレワ何處カラ何處マデノコトダ。

(二) 名詞を略し或わ名詞の代りに用いられるもの、

アレワ君ノダロウ。
私ノカラ出シテ見マショウ。
英吉利ノヨリワ、獨逸ノガ遙ニ上等ダ。

(三) ノガ、ノヲ、ノニ、ノモ等も是と同樣の意味を有する。

語句を重ねる場合に用いられるもの、

何ノ彼ノト言ッテ……。
行クノ行カナイノト言ッテ、ドウスルノダ。
善イノ惡ルイノト言ッテモ駄目ダ。

(四) 感歎又わ疑問の意をあらわすもの、

ソレデオ母サン、今日來タノ。
ソンナコト私ワ知ラナイノ。

四　ニ

此助動詞にわ、次ぎの樣な用例がある。

(一) 種々の語句に附屬して、副詞の職分をあらわすもの、

都ニ住ム。

富士山ニ、登ル。
机ニ、本ヲ載セル。
子供ガ門ノ外ニ、遊ンデ居ル。
森ノ上ニ、月ガ出マシタ。
朝五時ニ、起キマス。
イツモ夜中ニ、眼ガサメル。
面白ソウニ、聞イテ居ル。
悪イ様ニ、思ウ。

(二)

動作或わ狀態の標準を示すもの、

財産ヲ子ニ、與エル。
手紙ヲ友人ニ、送ル。
仕事ニ、取リカヽル。
誰カニ、話シテ見ヨウ。
先生ニ、叱ラレタ。
子供ニ、敎エラレルコトガ度々アル。

屬官ニ、書カセル。
兄弟ニ、知ラセル。
親ニ、似テ利口ダ。
アノ人間ワ畜生ニ、劣ル。
病氣ニ、ナル。
湯ガ水ニ、ナル。

(三)

ナドニの意味で用いられるもの、

アノ人ニ、ソンナ無駄ガアルモノカ。
女子ニ、ソンナ仕事ヲサセラレナイ。
オマエニ、出來ルモノカ。
私ニ、讀メマスカシラ。

(四)

語句を重ねる場合に用いられるもの。

女ガ五人ニ、子供ガ三人來マス。
笛ニ、太鼓ニ、鼓ガハイリマス。
字紙爲ニ、繪紙爲。

(五) 慣用の語句に用いられるもの、

ビール、ニ正宗、ニマッチ、ニ烟草。

月、ニ叢雲。花、ニ風。猫、ニマタ、ビ、泣ク子、ニオ乳。鬼、ニ鐵棒。年寄、ニ冷水。梅、ニ鶯。竹、ニ雀。

五　ノニ

此助詞にハ、次ぎの樣な用例がある。

(一) 名詞を省略して、その代りに用いられるもの、

遊ブハ、ニ骨ヲ折ッテ居ル。

住ムハ、ニ便利ニシマシタ。

長イハ、ニ限ル。

短イハ、ニ極メタ。

(二) タメニの意味に用いられるもの、

物ヲ買ウハ、ニ不便ダ。

試驗ヲ受ケルハ、ニ都合ガワルイ。

ヤカマシイハ、ニ閉口ダ。

イツモ長イハ、ニ苦メラレル。

白狀サセルハ、ニ骨ヲ折ラセタ。

(三) トの意味で句を接續するもの、

ツグ〳〵思ウハ、ニ何ウモ誤解ノヨウダ。

アノ人ノ來ルノヲ見ルハ、ニ何時モ遲イ。

(四) ニモ拘ラズの意味で、語句を接續するもの、

モウ日ガ暮レルハ、ニマダ來ナイ。

結構ダト思ッテ居タハ、ニソウジャナイノカ。

雨ガ降ルハ、ニ傘ヲ持タナイノカ。

アンナニ勉强シタハ、ニ又落第シタ。

今聞イタハ、ニモウ忘レタノカ。

隨分可愛ガッテヤルハ、ニ何トモ思ワナイ。

(五) 形容詞を重ねる場合に用いられるもの。

長イハニ短イハニ太イハニ細イハニ、種々ある。
白イハニ赤イハニ青イハニ、ソレカラ黄イノヲ下サイ。

(六)　後ニ續く語句を省略して、餘情を含ませるもの、

アレホド申シマシタノニ。
ソンナ御心配ヲ御無用ニシテ下サレバ宜シイノニ。
宅ニモ澤山アリマシタノニ。

六　ヲ

此助詞わ專ら動作の目的或わ標準を示す場合に用いられる。

西洋館ヲ作ル。
水ヲ汲ム。
靴ヲ磨ク。
勉强ヲスル。
鳥ガ空ヲ飛ブ。
垣根ヲ越エル。
國ヲ去ル。

七　ノヲ

此助詞わある名詞を省略して、その代りに用いられる。

(一)　體言及び其類性のものに附屬するもの、

君ノヲ借リテ來タ。
誰カノヲ間違ッテ持ッテ來タ。
他人(ヒト)ノヲ貰ッタ。

(二)　用言に附屬するもの、

朝カラ君ノ來ルノヲ待ッテ居タ。
某博士ノ講義スルノヲ聞イテ來タ。
今死ヌノヲ殘念ガッテ居タ。
熱イノヲコラエテ食ベタ。
長イノヲ持ッテ來イ。

八　ト

此助詞にわ、次ぎのような用例がある。

(一) 動作の標準を示すもの、

子供ノ名ヲ太郎トツケル。

僕ノ講義ヲ近松トキメタ。

コレヲ名詞トシタラ何ウダ。

(二) 專ら語句を接續するもの、

汽車カラ降リルト、雨ガ降ッテ來タ。

行ッテ見ルト、モウ居ナカッタ。

寒クナルト、身體ガ惡クナル。

今晩某君ガ來ルト見エル。

ソンナコトワ決シテナイト思ウ。

コレワ確實ナ說デアルト信ズル。

(三) ト共ニの意味で用いられるもの。

今晩弟ト散步スル約束ヲシタ。

英國ト同盟ヲ結ンダ。

後デユックリ君ト相談ショウ。

昨日ワ一日子供ト遊ンダ。

櫻モ李モ桃モ、梅ト、一所に咲ク。

アナタト行キマショウ。

(四) 語句を重ねる場合に用いられるもの、

士官ト、兵卒ト、一所ニ食事シテ居ル。

靴下ト、襟飾トソレカラヅボン下ヲ買ッテ來イ。

茄子ト、黃瓜ト、西瓜ト、南瓜ガ竝ンデ居ル。

行クト、歸ルト、何チラガ早イカ。

取ルト、遣ウト、大違ダ。

多イト、尠イト、ドチラモ利害ガアル。

(五) 比較する意味で用いられるもの、

京都ト、ドチラガ宜イカ。

春ト、秋ト、ドチラガ好キカ。

(六)　條件の意味で用いらるもの、

男ト、違ウ。
泣クト、叱ラレル。
雨ガ降ルト、行カナイ。
アノ人ニ讀マセルト、大層面白イ。
強イト、勝テル。
重イト、持タレナイ。

(七)　種々の語に附屬して副詞を形作るもの、

今晩ワユックリト、寢ヨウ。
この子供ワマル〳〵ト、太ッテ居ル。
ウマ〳〵ト、ヤラレテ仕舞ッタ。
僕ワ斷然トヤメル。
此處ニ來ルト、樂々トスル。

九　エ

文語においてわ、へわ方向を示し、ニわ場處を示すものであると說明せられ、古來その用例の區別について、文法家が特に注意を拂つて居る。然るに、口語においてわ、その區別が殆ど消滅して、方向にも場所にも等しくエを用いるのが、普通の慣例になつた。尤も、方言によつてわ、ニを用いるところもあるが、然し東京語においてわ、普通エを用いて居る。

東京、エ行ク。
歐羅巴、エ巡回ヲ命ゼラレタ。
遠ク、エ行ッテシマッタ。
後、エ向クト危イ。
自轉車、エ乘ル。
海、エ入ル。
棚、エ入レテ置イタ。
座敷、エ上ガレ。

高等學校エ入學シタ。
弟エヤッテシマッタ。

十　ヨリ　ヨリカ　ヨリワ　ヨリモ

文語においてわ、此助詞の用例に二種あつて、其一わ時間の範圍の始點を示すものと、其二わ比較を示すものとである。然るに口語においてわ、その第一種の方わ殆ど用いられないで、比較の場合だけになつて居る。例えば、

父母ノ恩ワ海ヨリ深イ。
行クヨリ寢ル方ガヨイ。
思ッタヨリ此方ガヨカッタ。
イッモヨリ早ク來テ貰イタイ。
貰ウヨリカ買ウ方ガ得ダ。
米ヨリカ麥ガ滋養ガアル。
見ルヨリワ聞ク方ガ面白イ。
夏ワ海ヨリモ山ガ健康ニ適スル。
櫻ヨリモ梅ガ好キダ。

十一　カラ

此助詞にわ體言に附屬するものと、用言に附屬するものとあつて、其性質が多少違う。その體言に附屬するものわ、專ら動作の起點を表示し、その用言に附屬するものわ、專ら原因結果の語句を連續するのである。

(一)　動作の起點或わその關係の場所を表示するもの、

朝起キルトカラ、少シモ隙ガナイ。
此節學校ガ午前七時カラ始マル。
滿六歳カラ就學スル。
學校カラ歸ッテ來ルト、スグ勉强ヲ始メル。
東京カラ送ッテ來タノダ。
懷カラ手ヲ出シテ居ル男ダ。

コレワ九州カラ出ルモノダ。

(二) 比較の標準を表示するもの、

コヽカラ見ルト、一番景色ガ宜イ。

戰爭前カラ見レバ、物價ノ騰貴ワエライモノダ。

ソレカラ思ウト、此方ガ宜イナ。

(三) 原因結果の語句を接續するもの、

ソンナ處エ行クカラ惡ルイ。

實ワアナタデスカラオ話スルノダ。

マダ讀マナイカラ知ラナイ。

嬉シイカラ笑ウノダ。

馬鹿ナコトヲスルカラ、笑ラワレルノダ。

十二　マデ　カラ＝マデ

この助詞わ普通カラと相對して、範圍を示す場合に用いられるのであるが、然しながら、カラに關係なくしても用いられる。

(一) 專ら事物或わ動作の範圍を示すもの、

今日マデ待ッテ居ルノニ、マダ來ナイ。

逆境ニ立ット、親類マデ近寄ラナクナル。

晴レルマデ、待ッテ居ヨウ。

昨晩ワ遲クマデ、起キテ居タ。

來月ノ中旬マデ、猶豫スル。

三十人マデ入レル筈デス。

ウマク行カナケレバ、止メルマデサ。

(二) カラマデと相對して用いられるもの、

初カラ終マデ、世話ヲシタ。

十八歲カラ二十歲マデ、ダソウダ。

官廳ノ執務時間ワ午前八時カラ正午十二時マデダ。

青森カラ長崎マデ、ズット汽車デ行ケル。

頭カラ骨マデ、殘ラズ食ッテシマッタ。

起キルカラ寢ルマデ、少シモ隙ナシダ。

十三　デ

この助詞わ文語におけるニテの約つたもので、體言及びその類性のものに附屬して、用言の意味を限定し、或わ、その標準を表示するのである。これに次ぎの樣な用例がある。

(一)　場所に關する體言に附屬するもの、

コノ本ワ神田デ、買ッテ來タ。
浪花節ワ今東京デ、大層流行シテ居ル。
門司デ、汽船ニ乘ル積デス。
猫ガ木ノ上デ、眠テ居ル。
先生ワ病院デ、殁クナラレマシタ。
昨日チョット途中デ、逢イマシタ。
コヽデ、少シ休ンデ行キマショウ。
コチラデ、一服何ウデス。

(二)　物品に關する體言及びその類性のものに附屬するもの、

コノ畫ワ鉛筆デ、書イタノダ。
ソコヲ紙デ、張ッテオケ。
今度ノ家ワ煉瓦デ、作ルツモリダ。
小刀デ、手ヲ切ッタ。
ランプデ、本ヲ讀ムト、目ガワルクナル。
自轉車デ、玉川エ遊ビニ行ッタ。
コレデ、オ、間ニ合イマセンカ。
親ノオ蔭デ、ドウカ暮シテ居ル。
人ノ力デ、成リ上ッタモノダ。

(三)　時に關する體言に附屬するもの、

コレワ一週間デ、大抵出來上リマス。
三ケ年デ、切リ上ゲル計畫ダ。
飯ガ濟ムト、其後デ、話ヲスル。

(四)　其他の體言及び類性のものに附屬するもの、

マダホンノ小兒デ、困リマス。

コノ間カラ人ノ事デ、奔走シテ居ル。
アノ人ワ相場デ、大層損ヲシタ。
仕事カ一人デスル方ガ早イ。
食ウヤ食ワズデ、奔走シタ。
見タ上デヤメテ來タ。

(五) 文を接續する場合に用いられるもの、

コレモ優等デ、アレモ優等ダ。
アノ人モ肺病デ、子供モ肺病ダ。

十四　ノデ

この助詞わ用言に附屬して、原因を表示する場合に用いられる。

コノ節ワ暑イノデ、何ニモ出來ナイ。
雨ガ非常ニ降ッテ來タノデ、目ガサメタ。
子供ガアマリ泣クノデ、心配デス。
ヨク分ラナイノデ、早ク歸リマシタ。
見ラレルノデ、恥カシイ。
アマリ客嗇ナノデ、評判ガワルイ。

十五　モ

この助詞わ或るものを綜合して、その分量、程度、あるいわ、範圍を表示する性質を有する。

(一) 分量を表示するもの、

京都エ行クニワ、十圓モアレバ宜シイ。
一年モ經タナイ内ニヤメタ。
アノ下宿屋ニワ十四五人モ居ル。
酒ワ幾ラモ頂ケマセン。
私ナドワ一日モットマリマセン。
ゴ飯ヲ五杯モ食ベマス。

(二) 程度或わ範圍を表示するもの、

ロク〳〵讀メモシナイ。
サスガノ豪傑モ弱ッタカナ。

行キモシナイデ分ルモノカ。
泣キモシナイデボンヤリシテ居ル。
飛鳥モ落ス勢デス。
井ノ中モヨク捜シテ見マシタ。
酒ワモウ見ルモイヤダ。
モウ薬モ通ラナクナリマシタ。

(三)

語句を重ねる場合に用いられるもの、

京都モ大阪モヨク知ッテ居ル。
夜モ昼モ同ジ様ニ暑イ。
梅モ櫻モ桃モ一所ニ咲キマス。
年寄モ子供モ大抵同ジ様ナモノデス。
東カラモ西カラモ大勢人ガ來ル。
何ニモ彼モヨク分ッテ居リマス。
見ルヨリモ聞クヨリモ遙ニマシダ。
嬉シクモ悲シクモナイ。

(四)

神田ニモ本郷ニモアリマス。
秋田エモ青森エモ行キマス。

慣用の語句として用いられるもの、

君モ君ダシ僕モ僕ダ。
品ワ良イガ、然シ高イモ高イ。
ソンナコトサセル奴モサセル奴ダ。

十六　ノモ　ニモ　サエモ　カラモ　エモ　ヨリモ

此助詞にわつぎのような用例がある。

(一)　體言に附屬するもの、

大阪ノモ成功シタ樣ダ。
長崎ノモ來ル。
僕ノモ默目ラシイ。
誰ノモマダ參リマセン。

(二)　用言に附屬するもの、

コウシテ行カレルハモ、全クアナタノオ蔭デス。
櫻ノ咲クハモ、コレカラデス。
日ノ長クナルハモ、今日アタリガ止リデショウ。
ナレルト暑イハモ、サホド感ジマセン。
君ノ來タハモ、知ラズニ居タ。

(三)

語句を重ねる場合に用いられるもの、

アナタハモ私ハモ當リマシタヨ。
行クハモ行カナイハモ、君ノ勝手ダロウ。
長イハモ短イハモアリマス。
雪ノ降ルハモ雨ノ降ルハモ、厭ワズニ働キマシタ。

(四)

ニモ、サエモ、カラモ、エモ、ヨリモ等のごとく、他の助詞と結合して用いられるもの、

君ニモイツカ話シタ筈ダ。
アノ方デサエモ出來ナイモノガ、私ナドニワ猶更デス。
アノ方デサエモ出來ナイモノガ私ナドニワ猶更デス。
京都カラモ送ツテ來マシタ。
何處エモ參リマセンデ、宅ニ引込ンデ居リマス。
ラムネヨリモ、麥湯ノ方ガ宜シイ。
イカサマガシテアルカモ知レマセン。

十七　コソ

この助詞わ意味をつよめ、あるいわ多くのものゝ中から、特に選擇する場合に用いられる。

今日コソ本望ヲ達シテヤラナケレバナラン。
君コソウマイコトヲシテオルデワナイカ。
イヤソレコソ大變ダ。
見テコソ分ルガ、只聞イタダケデワ駄目ダ。
ヨウコソオ尋ネ下サイマシタ。
仲ノヨイコソ、何ヨリ仕合セデス。

ソレヲ思エバコソヤカマシク云ウノダ。

十八　サエ

文語でわ古くサヘ、ダニ、スラと竝び用いられたのであるが、平安朝以降、その間の區別が朦朧になつて來たのである。現在の口語においても、三者の區別が消滅したのみならず、すべてサエで代表する樣になつて居る。

腕サエアレバ、藥ニ通ツテ行カレル。
水サエ喉ニ通ラン。
漬物サエアレバ、何ニモ入リマセン。
雪サエ降ラナケレバ、トニカク出掛ケマショウ。
只行キサエスレバ、宜イダロウ。
寒イサエ辛棒スレバ、土地ワ申分ナシデス。
靜ニサエシテ居ルト、スグ癒リマス。
座頭ガ京都エサエ行クモノ、行カレナイコトガアルモノカ。
親戚カラサエ見離サレタノダ。
見テサエゾツトスル。

十九　ノミ

この助詞わ口語でわあまり用いられないので、大抵ダケあるいわバカリが用いられる。

骨ヲ折ツテオルノワ、私ノミデス。
コレノミダロウト思ウ。
チヨツト行ツテ見タノミダ。

二十　バカリ　バツカリ　ノバカリ

これわ事物或わ分量程度等を限示する助詞で、ノミ、ダケと殆ど同じ樣な意味を有する。然し、限示する意味から一轉して、只漠然と分量或わ程度を表示することもある。

(一)　事物、分量、程度等を限示するもの、

毎日〳〵雨バカリ降ツテ困リマス。

君バカリウマイコトヲシテ居ルト云ウコトダ。
ソレバッカリガ心配デス。
段々勞レルバカリデ、ヨクワナリマセン。
苦シイバカリデ、何ノ得ルトコロモナイネ。
何時モオ願スルバカリデ、オ氣の毒デス。
アレワ此頃競馬ニバカリ、凝ッテ居ル。
只綺麗ナバカリデ、品ワワルイ。
芝居エ行クノバカリ、樂シンデ居ル。

(二) 分量或わ程度を表示するもの、

コノ仕事ヲ始メルノニ、千圓バカリカヽル。
學生ガ凡ソ五百人バカリ、アル樣デス。
神戸マデ十三時間バカリカヽル筈デス。
横濱マデ八里バカリアリマス。
私ワ佛蘭西ニ三年バカリ居タ。
ソレバカリデ澤山カ。

二十一 ダケ

この助詞にわ、つぎの樣な用例がある。

(一) 分量或わ程度を表示するもの、

五百人ダケ入學ヲ許シマス。
家ノ高サダケ雪ガ積ッタ。
セメテ中學ダケ卒業サセタイ。
食ウダケ働カレレバ結構デス。
苦シイダケ働イテ見ロ。
近ケレバ近イダケ都合ガ宜イ。

(二) 事物、分量、程度等を限示するもの、

私ダケ行キマス。
家族ニダケ知ラセテヤリマショウ。
見ルダケデ止メテオキマス。
只座ッテ居ルダケデ、何ニモオ役ニ立チマセン。

讀マセルダケデ、外ニワ何モシマセン。

(三) 原因と結果と相當する意味を表示するもの、

身分ガ宜イダケ、流石ニ品ガアル。
一萬圓モカケタダケニ、中々立派ダ。
腕ガアルダケニ、落チツイテ居ル。
座敷ガ綺麗ナダケ、心持ガ好イ。
仕事ガ忙シイダケ、利益モ多イ。

二十二　キリ　ギリ

是もダケ、バカリなどと同じく、事物、分量或わ程度を限示する性質を有する。卽ち、

今日ギリデ、モウ參リマセン。
コレキリデヤメマス。
昨日家ヲ出タギリ、マダ歸ラナイ。
今年ノ正月逢ツタギリ、ソレカラ逢ワナイ。
君ガ來ルキリデ、誰モ來ナイ。
モウ百圓ギリデ、何モナイヨ。
暑イノガ苦シイギリデ、外ニコウトイウコトガアリマセン。

普通にわ大抵ダケが用いられてキリ、ギリがあまり用いられない。

二十三　ホド

この助詞わ種々の語句に附屬して副詞を形作り、分量或わ程度を表示するものである。

コンナ品ワ山ホドアル。
雪ワ家ノ高サホド積ツタ。
コヽカラ靜岡マデ六時間ホドカヽリマショウ。
アノ大學ニワ學生ガ二百人ホド居マス。
品川マデワ大抵二里ホドモアリマショウカ。
大森マデワドレホドアリマスカ。

コレホドイウノニ、マダ分ランカ。
腹ノサケルホド、食ベタイ。
泣クホド苦シイ目ニアッタ。
車ノ遅イホド、不愉快ナコトガナイ。
言エバ言ウホド、結果ガワルクナル。
褒メラレ、バ褒ラレルホド、慢心スル。
長ケレバ長イホド、便利デス。
讀メバ讀ムホド、分ラナクナル。

二十四　ホカ　シカ

是わあるものを除外する意味を表彰するので、その表彰の形式わダケ、バカリなどと全く反對になる。即ち、あるものを除いて、その他のものを打ち消す意味になるのである。

僕ホカ行キマセン。
酒ワ麥酒ホカ飲メナイ。
今朝御飯ヲ一杯ホカ頂キマセンデシタ。
ナニマダ三里ホカ來ナイカラ、前途遙ダ。
モウ泣クヨリホカ仕方ガナイ。
イツ來テモ茶ヨリホカ出サナイ。
何ウシテモヤルトコロマデヤルホカ仕方ガナイ。
昨晩ワアナタノオ母サンニシカ逢ワナイ。
コヽニワ短イノシカナイ。

二十五　クライ　グラ

これわ種々の語句ニ附屬して、分量或わ程度を表示する助詞である。

馬グライ可愛モノガ外ニナイ。
私グライ若クテ苦勞シタモノガナイ。
セメテ親類グライエ話シテモヨカロウ。
十年グライ辛棒スレバ獨立ガ出來ヨウ。

モウ三里グライモ歩行タカシラ。
百圓グライアレバ澤山デスカ。
ドノクライアレバ、間ニ合イマスカ。
友人ト散歩スルグライ、樂シミナコトガナイ。
字ガ書ケヌクライ、不自由ナコトガナイ。
少々痛イクライワ我慢スルサ。
少シグライ飲ンデモ、害ガアルマイ。
モウ少シ勉強シタラ師範學校エグライワ、ハ入レソウナモノダ。

二十六　ドコロ　ドコ

これわ分量或わ程度の豫想外であるか、又わ特に注意を要する場合に用いられる。豫想外の意味を表示する場合にわ、カ、ノ、デと結び合わせて用いられる。

芝居ドコロノ騒ギデナイ。
叱ラレルドコロノ話デワアルマイ。
中學ドコロカ、小學モ卒業シナイ。
百圓ドコロカ、千圓位ダ。
褒メラレルドコロカ、大小言ヲ食ツタ。
ソンナ呑氣ナ話ドコロデアリマセン。
苦シイドコロノ話デナイ。
ソンナコト知ツテ居ルドコカ。
コヽガホントノ聞キドコデス。

此ドコロわダケ、ホド、ホカ、クライなどと共に、助詞として取扱うべきものか、名詞として取扱うべきものか、又わ接尾語として取扱うべきものかということが疑問である。しかるに、此等のものわ、其用例の如何によつてわ、三者の何れに取扱つても差支ない。又或る場合にわ助詞として、或る場合にわ接尾語として、取扱わなければならんこともある。要するに、用例上原語からわ餘程遠ざかつて居るから、此等のものを助詞と

して取扱い、又場合によつてわ、接尾語としても取扱うというのが、最も穩であらう。

二十七　ワ

この助詞わ物を區別する意味を有し、體言及びその類性のものに附屬して、主格の樣なはたらきをすることが多い。

(一)　體言及びその類性のものに附屬するもの、

風ワ吹クガ、雨ワ降ルマイ。
夏ワ涼シクテ、冬ワ暖イ。
私ワ中學ノ三年生デス。
泣キワシナイガ、隨分痛カツタ。
ソンナ無理ナコトワサセナイ。
別ニ苦シミワシナイガ、心持ガ惡カツタ。

(二)　副詞に附屬してその意味を強めるもの、

マダ遲クワアルマイ。
善クワ知ランガ、ソンナコトワアルマイ。
稀ニワソンナコトモアルダロウ。
慥ニワ言エナイガ、多分ソウラシイ。
タダワ置カレナイ。
明日マデワ待ツテモ宜イ。

二十八　ノワ　エワ　トワ　カラワ　ヨリワ　マデワ

これわ專ら用言に附屬して、ワと同樣な意味を表彰する。

(一)　用言に附屬するもの、

聞クノワ今始メテデス。
アマリヤカマシク云ウノワ惡イ。
今始メルノワ少シ遲イダロウ。
長イノワ閉口デス。
赤イノワ澤山アリマスガ、青イノワナクナリマシタ。
靜ナノワ宜イガ、少シ不便ダ。

見ラレルハワ恥シイ。

(二) 名詞を省略するもの、

君ハワマダ來ナイカ。

大阪ハワウマク行クカシラ。

イツカオ話ハワ何ウナリマシタ。

(三) エワ、トワ、カラワ、ヨリワ等のごとく、他の助詞を結合して用いられるもの、

東京エワ行クガ、横濱ワヤメヨウ。

八百屋カラ買ッタハトワ、マルデ違ウ。

神戸カラワ別ニ通知ガ來ナイ。

京都ヨリワ大阪ノ方ガ活氣ガアリマス。

七十マデワ是非達者デ居タイモノダ。

君コソワ百マデ大丈夫ダ。

二十九　バ

この助詞わ用言の假定形に附屬して、假定或わ條件等の意味を表彰する。

(一) 假定或わ條件の意を表彰するもの、

ヨク讀メバ、分ルダロウ。

朝早ク起キレバ、心持ガ宜イ。

今年試驗ヲ受ケレバ、屹度ハイレル。

アマリ遲ケレバ、困ルネ。

長ケレバ、少シ切ッタラ何ウダ。

行カナケレバ、困ルダロウ。

(二) 接續の用をするもの、

酒モアレバ、肴モアル。

獨逸語モ出來レバ、英語モ達者ダ。

僕モ行カナケレバ、先キカラモ來ナイ、

聞キモシナケレバ、見モシナイ。

三十　テ　デ

此助詞わ用言の連用形に附屬して、接續の用をなし、又結合動詞を形作ることもある。

(一)　接續の用をするもの、

淺草エ行ッテ、ソレカラ向島エ廻ッタ。
大ニ勉強シテ、試驗ヲ受ケル積ダ。
人ニ頼ンデ、買ッテ貰イマシタ。
京都ニ行ッテ、坊主ニナッタ。
日ガ暮レテ、道ガ遠イ。
雨ガ降ッテ、地固マッタトイウモノダ。
體ガ細クテ、中ガ空デス。
天氣ガ良クテ、申分ナシデス。

(二)　結合動詞を作るもの、

芝居エ行ッテ見ル。
コノ節ワ非常ニ勉強シテ居ル。
鳶ワ高ク飛ンデ行ッテシマイマシタ。
讀本ヲ買ッテ來タ。
子供ヲ二人連レテ行キマシタ。

(四)　用言に附屬して副詞の性質をあらわすもの、

泣イテ親ヲ諫メマシタ。
追テコチラカラ申上ゲマス。
コレデワ少シ細クテ困ル。

三十一　テモ　デモ

此助詞わ假定或わ既定の條件を表示するもので、文語のトモ、ドモの變化したものである。

(一)　假定の意を表示するもの、

少シ位ワ飲ンデモ、害ワアルマイ。
イッ行ッテモ、留守ダ。

幾ラモガイテモ、今ニナツテワ駄目デス。
タトイ何ンナコトガアツテモ、決シテ志ヲ變ジナイ。
イクラ高クテモ、買ウ積ダ。

(二) 既定の意を表示するもの、

昨日ワイクラ呼ンデモ、不通ダツタ。
雨ガ降ツテモ、道ガ別ニ惡ルクナラナカツタ。
留守ニナツテモ、變リガナイ樣ダ。

(三) 條件を重ねる場合に用いられるもの、

雨ガ降ツテモ、雪ガ降ツテモ、出掛ケマス。
大根ワ煮テモ、漬ケテモ、食ベラレマス。
モウコウナツテワ、泣イテモ、吠イテモ、駄目ダ。
煮テモ、燒イテモ、食イナイ奴ダ。
長クテモ、短クテモ、構イマセン。

トイツテモの場合にタツテ、ダツテということがある。

金ガアルタツテ、アマリヒドイ。
苦シイタツテ、構ワナイ。
女ダツテ、馬鹿ニ出來ナイ。
日曜ダツテアルダロウ。

三十二　デモ

此助詞ワ條件のテモ、デモの一轉したもので、漠然とある條件を表示し、或ワ漠然とある標準を表示する性質を有する。

(一) 漠然とある條件を表示するもの、

天氣ワ穩デモ、油斷ワ出來ナイ。
イクラ女デモ、ソレデワ承知シマイ。
那翁デモ、コレワ出來マイ。
京都ノ人デモ、皆綺麗デワナイ。
コンナモノデモ、御間ニ合イマスカ。
タトイ小兒デモ、許シテ置カナイ。

(二)

漠然とある標準を表示するもの、

セメテ君デモ、來テ呉レタラト思ッタ。
ドウゾ湯デモ、一杯頂キタイ。
人デモ、聞イテ居ルト惡ルイ。
遲クデモ、構イマセンカラ來テ下サイ。
棚ノ上ニデモ、置イテ呉レ。
ナニ知ランデモ、ナカッタガ……
ソノ位デモ、アレバ助カリマス。

(三)

語句を重ねる場合に用いられるもの、

十錢デモ、二十錢デモ、御寄附ヲ願イマス。
兄サンデモ、姉サンデモ、構イマセン。
水デモ、湯デモ、少シ下サイ。
飲マンデモ、食ワンデモ、差支ナイ。

三十三　モノ、

これわ相調和しない二つの事柄を接續する場合に用いられる。

風ワ吹クモノ、妙ニ蒸暑イ。
學問ワアルモノ、アマリ働ノナイ人ダ。
見タトコロワ好イモノ、決シテ丈夫デナイ。

三十四　ナラ　ノナラ　モノナラ

是わ文語におけるナラバ、ナレバの變化したものであるが、然しながら、口語でわ既定と未定の區別が曖昧であつて、前後の關係から判別するより外わない

練瓦造ナラ、大丈夫ダロウ。
ホントウノ正宗ナラ、エライモノダガ……
酒ナラ眞平御免ダ。
君トナラ何時デモ行キマショウ。
行クナラ早ク來イ。
重イナラ少シ取ッタラヨカロウ。

晩マデナラ上ラレマショウ。
出來ナイノナラ出來ナイト、早ク言エバ宜イニ。
來ルノナラ來ルデヨロシイ。
コンナニ遠イノナラ、車ニ乘ッテ來タノニ。
君ガ行コウモノナラ、ソレコソ大變ダ。
ソンナニ飲ムモノナラ、苦シクナッテ困リマス。
アレニ任セヨウモノナラ、何ウナルカ分ランヨ。

三十五　シテ

往ッタリ來タリシテ居ルのシテわ動詞であるが、此シテわ最早動詞の意味を失つて、次きのごとく種々に轉用されて居る。

何モナカッタカシテ、直グ歸ッテ來タ。
ソレカラシテ、大阪エ行キマシタ。
ソンナコトモコサイマスカラシテ、注意シナイトイケマセン。
君トシテ、助ケテヤリマショウ。
何ウカコウカシテ、凌イデ居マス。
君ニシテワ千慮ノ一失ダ。

三十六　トモ

文語においてわ、假定の條件を表示するのであるが、口語においても、粗ぼ同樣に用いられる。

(一)　假定の意を表示するもの、

少シバカリ雨ガ降ロウトモ、出掛ケルツモリダ。
何ウナロウトモ、僕ワ構ワナイ。
殺サレヨウトモ、一歩モ退カン。
私ワ行カズトモ、宜シウゴザイマスカ。
金ワナクトモ、學問ガアレバヨロシイ。

(二)　他の語に附屬して副詞を形作るもの、

遲クトモ十日ニワ來ル筈ダ。
速クトモ四五日ワカ、ルダロウ。

(三)

一日ナリトモ活カシテ置キタイ。
何ナリトモオ好ミ次第デス。
トモのモを省いて用いるもの、
行コウト行クマイト僕ノ勝手ダ。
行カズトヨクアルマイカ。
何ナリト御遠慮ナク仰シャッテ下サイ。

(四)

應答の語に附屬して其意を強めるもの、
面白イモノガアルカ。アルトモ〳〵。
オ前一人デ行ケルカ。行ケルトモ。
ソレデヨイカ。ヨイトモ。

三十七　ナリ　ナリト

この助詞わデモと粗ぼ同意味で、漠然と或る標準を示すものである。

(一)

漠然と或る標準を示すもの、
湯ナリ粥ナリ啜ッテ居ル。
本ヲ讀ムナリ、字ヲ書クナリ、勉强シロ。
麥酒ナリ、葡萄酒ナリ、オ好次第ダ。
大阪エナリト、神戸エナリト、御都合デ御屆イタシマス。

(二)

副詞を形作るもの、
何ナリ取ッテオケ。
行キナリ飛ビ込ンダ。
寢タナリ動カレナイ。

三十八　タリ　リ

この助詞わ主に語句を重ねる場合に用いられる。
光ッタリ消エタリシテ、大層見事ダ。
見タリ聞タリシテ、面白カッタ。
寢タリ起キタリシテ居ル。
飛ンダリハネタリ、騷イデ居ル。
飲ンダリ食ッタリ、大愉快ダ。

三十九　シ

これも語句を重ねる場合、或わ、接續する場合に用いられる。

(一)　語句を重ねる場合に用いられるもの、

朝ワ早イシ、夜ワ遲イシ、少シモ隙ガナイ。

本モ讀メナイシ、字モ書ケナイシ、全ク駄目ダ。

雨モ降ルシ、風モ吹クシ、今日ワ止メヨウ。

(二)　接續の用をするもの、

空ニワ雲雀ガ囀ツテ居ルシ、林ニワ鶯ガ啼イテ居ル。

酒モ飲マナイシ、烟草モ嫌ダ。

隨分苦シイコトモゴザイマスシ、樂デワアリマセン。

御大名ノ引越ジャアルマイシ、殿樣ニモ家來ニモ只一人。

君ジャアルマイシ、ソンナコトスルモノカ。

四十　ヤ　ノヤ

この助詞にわ、つぎのごとく、二種の用例がある。

(一)　物事を竝列する場合に用いられるもの、

ウドンヤ、素麵ヲ食ベル。

鯛ヤ、鰈ヤ、種々ナ魚ガ居ル。

呉服屋ヤ、米屋ナドガ、竝ンデ居マス。

張金ヤ、藥罐ヤ、金盥ナドヲコシラエマス。

水銀ヤ、アルコールナドワ凍リマセン。

何ヤ、彼ヤデ遲クナリマシタ。

議論ヤ、何カデ日ヲ暮シタ。

笛ヤ、太鼓デ囃シタテタ。

長イノヤ、短イノヤ、種々アリマス。

讀ムノヤ、讀マナイノヤ、ゴタ〳〵シテ居ル。

(二)　人ヲ呼び掛ける時に用いられたるもの、

坊ヤ、早クオ出デ。

花ヤ、チョツト行ツテオ呉レ。

四十一　ヤラ　ノヤラ

この助詞にもつきのごとく、二種の用例がある。

(一)　語句を竝列する場合に用いられるもの、

踊ルヤラ歌ウヤラデ、大騒ダッタ。
笛ヤラ太鼓ヤラデ、賑デシタ。
何ヤラ彼ヤラデ、マゴ〳〵シテ居マス。
打ツヤラ蹴ルヤラ、隨分亂暴ナコトヲスル。
嬉シイヤラ悲シイヤラ、少シモ譯ガ分ラナカッタ。

(二)　推量或わ不定の意をあらわすもの、

何ウヤラ、晴レソウダ。
何ガ何ヤラ、チットモ譯ガ分リマセン。
ドコヤラ兄サンニ似テ居ル。
誰ヤラソンナコト言ッテ居リマシタ。
何ンナコトニナルヤラ、當ガッキマセン。

何ヲスルノヤラ、譯ガ分ラン。
手紙ガ屆カナイノヤラ、一向返事ガ來マセン。
腹デモ痛イノヤラ、大層泣キマスネ。
何時來タノヤラ、少シモ覺エガナイ。

四十二　ダノ

この助詞わ物事を竝列する場合に用いられるものである。

筆ダノ墨ダノ紙ダノ、種々貰イマシタ。
君ダノ僕ダノワ、一體丈夫ナ方ダネ。
ヤレ芝居ダノ、ヤレ相撲ダノト言ッテ、贅澤ナコトダ。

四十三　カ

この助詞わ文語における場合と同じく、疑問或わ不定、疑念の意を表彰するのであるが、又その意味から轉移した用例もある。

(一)　專ら疑問の意を表彰するもの、

明日ワ天氣ニナルダロウカ。

アナタワ何時オ歸リニナリマスカ。
オ父サン、アレワ氣違デショウカ。
昨日來タノワ君カ。
アソコニ居ルノワ兄サンカ。

(二)

不定或わ疑念の意味を表彰するもの、
幾分カ心持ガ宜イヨウダ。
ドコカ苦シイトコロガアルラシイ。
何ウカウマク行ケバ宜イガ。
何ダカ空模樣ガ怪シクナッテ來タ。
何ウナルカ、自分デ分ラン。
下女カ書生ガ居タハズダ。
三日カ四日デ來ルダラウ。
千圓カ二千圓アッタラ、出來ルダロウ。

(三)

反語になるもの、
ソンナ馬鹿ナコトガアルダロウカ。
コノ計畫ヲ始メタノワ、一體君ジャナイカ。
ソレデ及第ガ出來ルト思フカ。
アレデモウマク行クダロウカ。

(四)

語句ヲ重ねる場合に用いられるもの、
行クカ行カナイカ、聞イテ見ロ。
分ルンダカ分ラナインダカ、ボンヤリシタモノダ。
何ウカコウカ、爲テ居ル。
何カ彼ニカ、アルダロウ。
昨日カ今日カ、出來ル筈ダ。
犬カ猫カ、居ルト慰ニナル。
長イカ短イカ、調ベテゴラン。
水銀カ色ヲツケタアルコールカヲ入レル。

四十四　ノカ　モノカ　トカ　ドコロカ

これらの助詞にわ、つぎのような用例がある、

(一) 專ら疑問の意を表彰するもの、

コレワ君ノカ。

君イツ來タノカ。

今日學校エ行カナイノカ。

ソンナニ嬉シイノカ。

(二) 不定或わ疑念の意味を表彰するもの、

何ウナルノカ、頗ル心細イ譯ダ。

イツ來タノカ、少シモ知ラナカッタ。

(三) 反語になるもの、

ソンナコトデウマク行クモノカ。

君ナドニ出來ルモノカ。

芝居ナドエ行クモノデスカ。

芝居ドコロカ一寸ノ隙モアリマセン。

(四) 語句を重ねる場合に用いられもの、

行クノカ行カナイノカ、マダ分ラナイ。

嬉シイノカ悲シイノカ、樣子ガ分ラン。

重イノカ輕イノカ、早ク極メテ呉レ。

甘イトカ鹽辛イトカ、言ッテ呉レ。

四十五　ナ

この助詞わ專ら禁止に用いられるもので、ある。

決シテ落第スルナ。

アノ人ト交際スルナ。

何處エモ行クナ。

四十六　ナガラ

この助詞にわ、次ぎのような用例がある。

(一) 種々の語に附屬して、副詞的の語句を形作るもの、

蔭ナガラ御察シ申シテ居リマス。

何時モナガラ御壯健デ結構デス。

兩人ナガラ至極達者デス。
三日ナガラヒドイ目ニ逢ッタ。
自分ナガラ可笑シク思ッタ。
憚リナガラ御安心下サイ。
及バズナガラ盡力致シマショウ。
生レナガラ白痴ナラ仕方ガナイ。

(二) 動詞に附屬して、動作の繼續を意味するもの、

食イナガラ行クノワ可笑シイ。
飲ミナガラ話シマショウ。
隨分苦シミナガラ働イテ居ル。

(三) 用言に附屬して、條件を言いあらわすもの、

遊ビナガラ行ッテ見ヨウ。
苦シイト言イナガラ働イテ居ル。
ソンナコト百モ知リナガラ改メナイ。
苦シイナガラ辛棒シテ居ル。

四十七 ツヽ

これもナガラと同じく、動詞ニ連續して動作の繼續を表彰する。

イヤダト言イツヽ、ヤハリ辛棒シテ居ル。
知リツヽ、知ラン振ヲシテ居ル。
心ニ思イツヽ、御無沙汰ヲシタ。

以上わ豆爾波卽ち助詞として、現在用いられて居るものゝ主なものである。然しながら、此外にも此部類に屬すべきものわ、まだ澤山あるので、例えば、カタ〳〵、マヽ、カシラ、シロのごとき、その一例である。卽ち

(一) 遊ビカタ〳〵行ッテ見ヨウ。
見物カタ〳〵出掛ケタ。
オ詫カタ〳〵參上イタシマシタ。

(二) 昨日出タマヽマダ歸ラナイ。
受取ッタマヽデマダ見ナイ。

(三)　ソノマ、オ出ヲ願イマス。
　　昨日頼ンダノワ、モウ出來タカシラ。
　　何時ゴロ來ルカシラ。
　　僕ニ分ルカシラ。

(四)　何ニシロ大變ナコトガ出來タモノダ。
　　タトイナイニモシロ有ルトイウノガ人情ダ。
　　芝居ニシロ相撲ニシロ理屈ワ同ジコトダ。

以上に列擧した助詞のあるものを互に組み合せて、いわゆる結合助詞を作ることがあつて、これが實際の用例においてわ、頗る多いものである。例えば、ノカシラ、ニモシロ、バカリカ、バカリモ、バカリエ、バカリワ、ヨリカ、ヨリモ、ヨリワという樣に、二つ以上結合したものが頗る多いのである。

第十一章　語の構成

語彙わすべて單體のものでなくして、複體のものが尠くないのであるが、その複體のものに結合語(compounds)と分出語(derivatives)とある。結合語わ獨立の語彙が相結合して、一個の新語彙を形作るもので、例えば『山川』、『月日』、『草花』、『親子』、『年々』という樣な類であるが、これわ文法上の關係或わ職分を有することが殆とない。つぎに、分出語は接頭語(prefix)或わ接尾語(suffix)をある語彙に附加えて、新語彙を形作るものであるが、この接頭語接尾語わもと〳〵獨立の語彙でなくして、常に他の語彙に附屬して、文法上ある關係若くわ職分を表彰するものである。

(一)　接頭語わ新語彙を組成する、最も有力なる要素であるが、然しながら、それが附屬する爲めに、文法上の關係を生ずるのわ、極めて尠い。卽ち敬意を表する場合のオ、ゴ位に過ぎない。尤も漢語の不、都、合、不、仕、合、無、沙、汰、無、斷などの不や無

などを考に入れると、この類のものが隨分澤山あるが、普通の場合においてわ、オとゴを説明すれば十分である。

オ顔　オ手紙　オ立派　オ美シイ　オ早ウ　オ話　オ尋　オ花　オ雪　オ三ッ　オ十二　オ幾ッ　オミ帶　オミ足　オミオ汁　オミオ髮

同じ意味の接頭語を二つも三つも重ねるのわ、一般的のものでなくして、主に婦人が用いるものである。

ゴ論　ゴ免　ゴ退屈　ゴ遠方　ゴ尤　ゴ盛

(二)　接尾語わ接頭語よりも、新語彙を組成する要素として、更に一層有力なるものである。その内、敬意を表彰するもの、待遇を表彰するもの、數量を表彰するもの、或わ新しい品詞を組成するものを擧げて見ると、つぎの通りになる。

サマ　奥様　皆サマ　ゴ主人サマ　オ待遠サマ
サン　奥サン　姉サン　兄サン　前田サン
ドノ　聯隊長ドノ　大尉ドノ
クン　齋藤君　立花クン　三郎クン
ガタ　宮サマガタ　大臣ガタ　先生ガタ　アナタガタ
タチ　子供タチ　オ前タチ　自分タチ　私タチ
ドモ　車夫ドモ　私ドモ　ワレ〳〵ドモ　女ドモ
ラ　私ラ　僕ラ　ユナラ　ソナラ
テ　讀ミテ　書キテ　語リテ　彈キテ
サ　高サ　遠サ　重サ　嬉シサ　悲シサ
ケ　寒ケ　眠ケ　怖ケ
ゲ　可愛ゲ　惜シゲ　憎ゲ　嬉シゲ
ミ　重ミ　臭ミ　甘ミ　酸ミ

ソウ　痛ソウ　寂シソウ　聞キタソウ
ブル　勿體ブル　大人ブル　學者ブル
ガル　痛ガル　面白ガル　苦シガル　窮屈ガル
ラシイ　男ラシイ　天氣ラシイ　確ラシイ

第十二章　音韻變化

音韻の變化わ、文法上密接なる關係を有するものである。先に述べた通り、假名遣が歴史的であるか、將た、表音的であるか、ということが、文法の組織上に重要なる關係を有つのであるが、それと同じく、音韻の變化がその組織上に重要なる關係を生ずるのである。口語においてわ、實際の發音上、語形が變化したり、融合したりするものが、頗る多いのであるが、その變化したり、融合したりしたものを、その儘取扱う場合と、之をもとの語彙に還元して取扱う場合とで、文法の組織に影響を及ぼして來るのである。それで、今その變化したり、融合したりする習慣のある、主なるものを次ぎに列擧して見ると、

(一)　カ行五段活用の動詞が過去の助動詞テ、タに連接する時わ、書イテ、書イタ、解イテ、解イタ、泣イテ、泣イタという樣に、キがイに變化する。

(二)　タ行五段活用、ハ行五段活用及びラ行五段活用の動詞が過去の助動詞テ、タに連接する時わ、勝ッテ、勝ッタ、打ッテ、打ッタ、言ッテ、言ッタ、思ッテ、思ッタ、取ッテ、取ッタ、賣ッテ、賣ッタという樣に、促音ニ變化する。

(三)　ナ行五段活用マ行五段活用及びバ行五段活用の動詞が、過去の助動詞テ、タに連接する時わ、死ンデ、死ンダ、飲ンデ、飲ンダ、賴ンデ、賴ンダ、飛ンデ、飛ンダ、遊ンデ、遊ンダ、という樣に

鼻音に、變化する。

(四) 假定形における書ケバ、取レバ、押セバ、起キレバ、落チレバ、受ケレバ、任セレバと云う形式わ、實際發音する際に、書キヤ、取リヤ、押シヤ、起キリヤ、落チリヤ、受ケリヤ、任セリヤと云う樣に融合することがある。

(五) テイル、デイル、テオル、デオルわ、實際發音する際に、食ッテル、死ンデル、枯レトル、遊ンドルという樣に、融合することがある。

(六) 行ッテヲ、取ッテヲ、死ンデヲ、遊ンデヲという樣な形式が實際の發音に於て、行ッチヤ、取ッチヤ、死ンヂヤ、遊ンヂヤという樣に、融合することがある。

(七) 行クノデヲ、有ルノデヲ等の形式が、實際の發音において、行クンジヤ、アルンジヤという樣に融合することがある。

(八) 僕ヲ、花ヲ、コレヲ、ソレヲ、酒ヲ等の形式が、實際の發音において、ボクア、ハナー、コリヤ、ソリヤ、サケーという樣に融合することがある。然しこれわ鄙俗の語であるから標準語としてわ取ることが出來ない。

(九) 食ッテシマッタ、取ッテシマッタ、行ッテシマッタ等の形式が、實際の發音において、クッチヤッタ、トッチヤッタ、イッチヤッタという樣に融合することがある。これも鄙俗の語であるから取ることが出來ない。

以上のごとき實例わ、他にも尠くないが、此等のものわ、融合變化したまゝの形式で取扱うべきものか、何うかということが、文法組織上一考を要するのである。固より中にわ標準的のものと認められないものがある。例えば、ボクア、ハナー、サケー、クッチヤッタ、行ッチヤッタと云う樣なものわ、標準語としてわ捨てな

ければならん。けれども、その他のものわ、すでに標準的のものになつて居るから、之を捨てることが出來ないのである。然るに、從來文法の組織法わ、大抵分解的である。起キレバわ起キレにバの連接したもの、打テバわ打テにバの連接したものと云う樣に說明するのである。であるから、起キリヤ、打チヤ、或わ飲ンヂヤ、飛ンデ、取ツテという樣に融合して、一個の體形になり、之を分解することが出來ないものでわ、從來の分解的組織法をそのまゝ採用することが困難で、この場合にわ、起キリヤ、打チヤ、飲ンヂヤ、飛ンデ等を一個の體形として取扱う綜合的組織法によらなければならんのである。若し此方法によらなければ、文法の規則わ分解的に組織し、實際の發音に於いてわ、變化或わ融合することがあるという樣に說明するのも一策である。此口語法わ卽ちこの策によつて組織したものである。規則の上でわ分解的になつて居るが、實際の發音においてわ、起キリヤ、取リヤ、打チヤ、飲ンジヤと云う樣な形式わ、之を許容することゝしたのである。

日本口語法　畢

草の名もところによりてかはるなり
難波の蘆も伊勢の濱荻

明治四十四年一月二十日印刷
明治四十四年一月廿五日發行

定價金八十錢

不許複製

著者　保科孝一
發行者　森山章之丞　東京市神田區表神保町二番地
印刷者　中野鎌太郎　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷所　東洋印刷株式會社　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所　東京市神田區表神保町　電話特本局四三七一五三九番　振替貯金口座一三五番　同文館

大賣捌所　東京神田　東京堂　朝鮮京城　東京牛込　同文館支店　本町二丁目　大阪東區　寶文館　大阪北區　盛文館　日韓書房

古8V51

著生先郎三庄澤金士博學文

國語の研究

我が國語界には先人の未だ着手せざる方面甚だ多く到る處學術上の富源に滿ちゝたり。然るにこれ等の開拓を試みたるものは多く外人にして、我が國人はこれを捨てゝ顧みざるなり。我が領土内の國語の研究を外人にのみ委ね置くは實に不本意と云はざる可らず。此に於て國語學界に嘖々の名を博せし金澤博士は夙に見る處あり遠く古代の言語及朝鮮、沖繩、蒙古、アイヌ語等に亙りて、絶倫の精力と不朽の努力を以て精細研究し殊に博士の藏書として萬金不換の數種の古書の内特に珍寶なるもの十數葉を選び金屬版に附して之を本書に挿入し以て本文と對照斈味するに便せり。諸君は本書を繙くに當て先づその研究材料の豐富なると珍奇なる十數枚の挿入刷字とに驚くなるべし百聞は一見に如かず速かに本書を購ひて研究上の好參考とせらるべし。

菊版　クロース製　金壹冊　定價　金壹圓廿錢　郵稅金八錢

東京神田　同文館　表神保町

815
H692n

078518-000-1

815-H692n

日本口語法

保科　孝一/著

M44

DAC-2219